

**YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.5**

CONTENTS

Chapter I	The project on the Yamaguchi University campus in the 2007 fiscal year	1
Section 1	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2007 fiscal year	1
Section 2	Excavation on the Yoshida campus "Yoshida site"	5
Section 3	Excavation on the Shiraishi campus "Shiraisi site"	23
Section 4	Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site"	29
Section 4	Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site"	33
Appendix 1	The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2007 fiscal year	34
Appendix 2	List of researches in Yamaguchi University campus	37
Chapter II	Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities	58
Section 1	Exhibition activities	59
Section 2	Social education activities	65
Appendix	The earthen sutra vessel excavated from Kozuoh Aigasako in Hikari City	70

山口大学埋蔵文化財資料館年報

**山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成19年度－**

平成十九年度

Published by
Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 2011

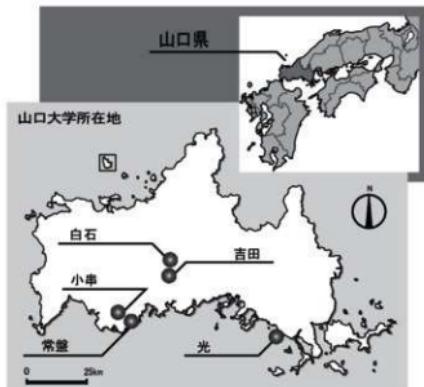
二〇一一年

2011

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成19年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報
平成19年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2011

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学埋蔵文化財資料館は、2004（平成16）年度から始まる法人化一期目の5年目に、本大学が保有する学術資産の収集管理と発信を主要な業務とする学術情報機構（現在の大学情報機構）の一組織に編入されました。同館は文字通り埋蔵文化財の上に建設された本大学にあって、これを発掘・保護することを基幹業務としています。同時に、これらの埋蔵文化財の学術的価値を広く社会に告知するため、展示企画や冊子発行などを中心とする情報発信活動が強く期待されることになりました。

そのため当館では恒常的な情報発信に取り組むなかで、相応の成果を収めて来たと自負しております。学内だけではなく、広く地域社会にも当館の役割への期待感も一定程度頂けるようになって参りました。

さて、2007（平成19）年度におきましては、本学の施設環境整備事業等が例年に比べ減少しましたが、当館が所在する吉田地区外での資料展示や、地域NPOとの連携事業など、学術情報の発信に重点を置いた新たな活動を開始した年となりました。

本書には、当館が同年に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願っております。そのことを通して、当館がこれまで以上に大学の内外にわたり、その役割を認識して頂ける機会となればと思っています。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げます。今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年2月

山口大学埋蔵文化財資料館長

纏纈 厚

例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」と呼称）が平成19年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畠直彦（大学情報機構埋蔵文化財資料館助教）・横山成己（大学情報機構埋蔵文化財資料館助教）・藤野好博（事務局情報環境部情報企画課教務補佐員※当時）が担当した。
また、現地での調査に際しては、株式会社宗像建設、中国産建株式会社、有限会社久富工務店に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成19年度から平成21年度にかけて、資料館員である田畠・横山・藤野・乃美友香（事務局情報環境部情報企画課事務補佐員）が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は田畠・横山・藤野が、写真撮影は田畠・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を田畠・藤野が行った。製図・整図は田畠・横山・藤野・乃美が行った。付篇掲載資料の実測・写真撮影は横山が行った。
5. 発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部情報企画課総務係（当時）が統括した。
6. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
7. 本文の執筆分担は目次に記した。
8. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、そのいずれもが文化財保護法（法律第214号）で示されるところの「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置している。山口大学各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡　　白石構内～白石遺跡　　小串構内～山口大学医学部構内遺跡
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡　　光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点（構内座標 $x = 0, y = 0$ ）とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第III系における座標値（X, Y）と構内座標値（x, y）とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

3. 平成19年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。
吉田構内農学部附属家畜病院改修II期工事に伴う本発掘調査……………YD2007-1
白石構内教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う予備発掘調査
……………S I 2007-1

4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居……SB　　土壤……SK　　溝……SD
柱穴・ビット……P i t　　落ち込み……SX

5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

6. 標高数値は海拔標高を示す

7. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器
断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章 平成19年度山口大学構内遺跡の調査

第1節	平成19年度に実施した遺跡調査の概要	（横山）	1
第2節	吉田構内（吉田遺跡）の調査		
1	農学部附属家畜病院改修II期工事に伴う本発掘調査	（横山）	5
2	駐車場整備工事に伴う立会調査	（横山）	16
3	資料館（東亞経済研究所）新営工事に伴う立会掘調査	（横山）	17
4	第一事務局庁舎改修工事に伴う立会調査	（田畠）	19
5	吉田寮前配水管敷設工事に伴う立会調査	（田畠）	20
6	農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査	（横山）	21
第3節	白石構内（白石遺跡）の調査		
1	教育学部附属山口中学校校舎改修その他工事に伴う予備発掘調査	（田畠）	23
2	教育学部附属山口中学校校舎改修その他工事に伴う立会調査	（田畠）	28
第4節	小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		
1	医学部総合研究棟改修I期工事に伴う予備発掘調査	（横山）	29
第5節	常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査		
1	工学部総合研究棟（本館）改修工事（Ⅲ期）に伴う確認調査	（田畠）	33
付節1	平成19年度 山口大学構内遺跡調査要項		34
付節2	山口大学構内の主な調査		37

第2章 平成19年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告 （横山） 58

第1節 資料館における展示・公開活動

1	創立30周年記念特別展（第23回企画展）		
1	『稲作到来～弥生人つくったとったたべた～』を開催	（横山）	59
2	平成19年度常設展『山口大学学宝展』を開催	（横山）	60
3	第24回企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催	（横山）	61
4	大学情報機構2007in医学Fes.にて企画展を開催	（横山）	62
5	大学情報機構2007in常盤Fes.にて企画展を開催	（横山）	63
6	第5回～第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催	（横山）	64

第2節 資料館における社会教育活動

1	第7回公開授業		
1	「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－」を開催	（田畠）	65
2	『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』を開催	（横山）	68

付篇 光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器 （横山） 70

挿図目次

第1章第1節 平成19年度に実施した遺跡調査の概要	
図1 山口大学吉田・白石構内位置図	2
図2 小串・常盤構内位置	3
図3 光構内位置図	4
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
図4 調査区位置図	5
図5 調査区平面図・断面図	7
図6 遺構断面図	7
図7 出土遺物実測図①	10
図8 出土遺物実測図②	11
図9 調査区位置図	16
図10 土層断面模式図	16
図11 調査区位置図	17
図12 土層断面観察地点1模式図	18
図13 土層断面観察地点2模式図	18
図14 調査区位置図	19
図15 調査区位置図	20
図16 調査区位置図	21
図17 A地点土層断面模式図	22
図18 B地点土層断面模式図	22
第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査	
図19 調査区位置図	23
図20 調査区平面図・断面図	24
図21 調査区遺構断面図	25
図22 出土遺物実測図	25
図23 調査区位置図	28
第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
図24 調査区位置図	29
図25 調査区詳細図	30
図26 調査区平面図・断面図	31
第1章第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	
図27 調査区位置図	33
第1章付節2 山口大学の主な調査	
図28 山口大学吉田構内地区割および主な調査区 位置図	51・52
図29 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区 位置図	53
図30 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図	54
図31 山口大学小串構内調査区位置図	55
図32 山口大学常盤構内調査区位置図	56
図33 山口大学光構内調査区位置図	57
付篇 光市小周防相ヶ追出土の土製経容器	
図34 小周防相ヶ追位置図	73
図35 土製経容器実測図	76
図36 土師器皿1～6	78
図37 土師器皿7～12	79
図38 土師器皿13～15	80
図39 紙本経・土師器皿納入模式図	81
図40 山口県出土の経容器	83

写真目次

第1章第1節 平成17年度に実施した遺跡調査の概要	
写真1 吉田構内航空写真	2
写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校） 航空写真	2
写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校） 航空写真	2
写真4 小串構内航空写真	3
写真5 常盤構内航空写真	3
写真6 光構内航空写真	4
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
写真7 遺構検出状況	8
写真8 遺構完掘状況	8
写真9 遺構完掘状況	8
写真10 遺構完掘状況	8
写真11 調査区南壁西端部土層断面	8
写真12 調査区南壁東端部土層断面	8
写真13 出土遺物①	13
写真14 出土遺物②	14
写真15 出土遺物③	15
写真16 掘削の模様	16

写真17 基礎工事掘削の模様	17	写真51 展示ポスター	62
写真18 土層断面観察地点1	18	写真52 展示の模様	62
写真19 土層断面観察地点2	18	写真53 展示ポスター	63
写真20 調査区全景	19	写真54 展示の模様	63
写真21 調査区東端土層断面	19	写真55 第6回大学情報機構理蔵文化財特別展の模様	64
写真22 A地点土層断面	20	写真56 第6回大学情報機構理蔵文化財特別展の模様	64
写真23 A地点土層断面	22	第2章第2節 資料館における社会教育活動	
写真24 B地点土層断面	22	写真57 種まき	66
第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査		写真58 館長挨拶	66
写真25 調査前全景	23	写真59 繩ない	66
写真26 出土遺物	25	写真60 苗の観察	66
写真27 調査区全景1	26	写真61 田植え	66
写真28 調査区全景2	26	写真62 雑草とり	66
写真29 調査区東壁土層断面	26	写真63 土器づくり	66
写真30 調査区南壁土層断面	26	写真64 稲の観察	66
写真31 調査区南部遺構検出状況	26	写真65 収穫具の説明	67
写真32 S X 1 土層断面	26	写真66 木庖丁による収穫	67
写真33 P i t 1、2半裁状況	26	写真67 参加者の皆さん	67
写真34 P i t 3半裁状況	27	写真68 白と杵による脱穀・麹すり	67
写真35 調査区南部遺構完掘状況	27	写真69 土器による炊飯	67
写真36 A地点東壁土層断面	28	写真70 食事風景	67
写真37 D地点土層断面	28	写真71 ワークショップ参加者（山口大学学生）の皆さん	69
第1章第4節 小車構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		写真72 窯を点火させるための火を起こす	69
写真38 第2調査区調査前全景	29	写真73 薪の上に子どもたちの作品を並べる	69
写真39 第3調査区調査前全景	29	写真74 瓦を被せ、全体を粘土で覆うと窯が完成	69
写真40 第1調査区南壁土層断面	32	写真75 5基の窯を順次点火させる	69
写真41 第2調査区西壁土層断面	32	写真76 窯は約24時間燃焼を続ける	69
写真42 第3調査区南壁土層断面	32	写真77 燃焼終了	69
第1章第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査		写真78 見事に焼き上がった作品	69
写真43 調査区全景	33	付録 光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器	
写真44 A地点土層断面	33	写真79 光市小周防相ヶ迫出土品	70
第2章第1節 資料館における展示公開活動		写真80 資料由来記録紙	71
写真45 第23回企画展ポスター	59	写真81 遺跡地遠景	73
写真46 企画展の模様	59	写真82 小周防相ヶ迫の遺跡推定地	73
写真47 平成19年度常設展ポスター	60	写真83 土製経容器蓋・身	77
写真48 常設展の模様	60	写真84 土師器皿1～6	78
写真49 第24回企画展ポスター	61	写真85 土師器皿7～12	79
写真50 企画展の模様	61	写真86 土師器皿13～15	80

表目次

第1章第1節 平成19年度に実施した遺跡調査の概要	第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告
表1 平成19年度山口大学構内遺跡調査一覧表 … 1	表4 埋蔵文化財資料館利用者の推移 ……………… 58
第1章第2節 吉田横内（吉田遺跡）の調査	表5 平成19年度月別入館者数 ……………… 58
表2 出土遺物観察表 ……………… 11	付録 光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器
第1章付節 山口大学構内の主な調査	表6 出土遺物観察表 ……………… 80
表3 山口大学構内の主な調査一覧表 ……………… 37	

第1章 平成19年度山口大学構内遺跡の調査

第1節 平成19年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連施設は、山口市（吉田・白石構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡と月待山遺跡内にまたがって位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、昭和53年に職員が配置されて以来、その重責を担い続けている。当館の平成19年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体（山口県および各市）の指導により、埋蔵文化財保護の立場から本発掘・予備発掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設（職員宿舎等）敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して、出来る限り工事掘削時に資料館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する当館の現状の職員配置は、専任教員2名と教務補佐員1名、事務補佐員1名である。

上記の調査の結果で埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、工事計画、工事設計の変更等で現状保存が可能であるかどうかについて厳密な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については地方公共団体への報告後、内業整理等を経て可能な限り迅速に発掘調査概報（本書）を刊行している。

上記の調査体制の下、平成19年度に当館が実施した大学構内における埋蔵文化財の調査は、下記の通り本発掘調査1件、予備発掘調査2件、立会調査6件、確認調査1件の計10件であった。次頁より該当年度の各遺跡（各構内）の概要を記す。

表1 平成19年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(m ²)	調査期間	本書掲載頁
本発掘	農学部附属動物医療センター改修II期工事	吉田	T-20	48	7月9日～7月24日	5～15
予備発掘	教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事	白石		121	6月13日～7月3日	23～27
	医学部総合研究棟改修I期工事	小串		6.75	8月1日～8月6日	29～32
立会	駐車場整備工事	吉田	J-21	10	6月15日	16
	資料館(東亜経済研究所)新館工事	吉田	L-20・21区	550	6月25～6月26日	17～18
	第一事務局庁舎改修工事	吉田	L-15	5	11月7日	19
	吉田寮前配水管敷設工事	吉田	M-11	11	1月10・15日	20
確認	農学部附属農場内電源敷設工事	吉田	Q-15 S-18	0.5	3月17日	21～22
	教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事	白石		38	8月6日、10月26・30日	28
	工学部総合研究棟(本館)改修工事(Ⅲ期)	常盤		147	9月19日	33

吉田構内（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部：山口市吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

平成19年度は本発掘調査1件、立会調査5件を実施した。

農学部附属動物医療センター改修II期工事に伴う本発掘調査は、前年度に実施した調査区の東に隣接する地点で実施した。前年度調査では古代の遺物を多量に包含する埋没谷とともに、大型掘立柱建物跡を始めとする3棟の建物跡を確認するなど、吉田地区に存在したと推測される「古代官衙」を解明する上で重要な成果を得た。今回の調査では、遺構群の東方（丘陵上位）への広がりの確認が期待された。調査の結果、土壤、Pit等の遺構が検出されたものの、狭小な範囲での調査であったため各遺構の関係性は把握できなかった。また、地形的に高位となる東方ほど遺構の分布が希薄となり、大学移転時の造成工事で地盤が広範囲に削平を受けていることが確認された。

立会調査では、吉田寮前配水管敷設工事において遺物包含層と推定される堆積層を、農学部附属農場内電源敷設工事では2地点において遺物または遺構を確認した。いずれも吉田構内丘陵地における



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



図1 山口大学吉田・白石構内位置図



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）
航空写真（東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）
航空写真（南から）

確認であり、未発見の集落等が埋存している可能性を高める調査結果となった。

白石構内 (教育部附属山口幼稚園：山口市白石三丁目1-2、同山口小学校：白石三丁目1-1、同山口中学校：白石一丁目9-1所在)

平成19年度は、予備発掘調査1件、立会調査1件を実施した。予備発掘調査では、縄文時代以前の河川堆積土と推定される層位と、その上位に形成された遺構群（落ち込み1基、ピット2基）を確認した。遺構の所属時期は不明である。立会調査でも同様に河川堆積土、遺物包含層を確認し、本年度調査地点の周囲にさらなる遺構・遺物等が埋存する可能性を高らしむる調査結果となった。

小串構内 (医学部、同付属病院：宇部市南小串1丁目1-1)

平成19年度は、予備発掘調査1件を実施した。医学部総合研究棟改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査では、排水井設置予定地3ヶ所に調査区を設定したが、いずれも現地表下約1.5m付近で旧耕土を確認した。小串構内北部域では、旧耕土下に近世の客土が存在し、以下に複数の遺物包含層が堆積するという共通の層序が確認されている。本調査周辺域も同様の堆積層が埋存するものと思われる。

常盤構内 (工学部：宇部市常盤台2丁目16-1、尾山宿舎：同上野中町2658-3所在)

確認調査1件を実施した。平成18年度より、山口県教育委員会により山口大学工学部構内遺跡の範



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）

平成19年度に実施した遺跡調査の概要

囲が修正され、調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地外となった。慎重を期して工事中の確認調査を実施したが、削平された地山を検出するに止まった。

光構内（教育部附属光小学校、同光中学校：光市室積8丁目4番1号）

平成19年度は、該当地での掘削を伴う開発等工事は実施されなかった。

平成19年度は、例年に比して地下の掘削を伴う工事計画が少ない年度であった。しかしその中でも吉田地区（吉田遺跡）、白石地区（白石遺跡）で得た新知見は、本学の今後の埋蔵文化財保護業務、そして遺跡の実態解明へ大きな手掛かりとなるものである。



写真6 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査

1. 農学部附属動物医療センター改修II期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内T-20区

調査面積 約48m²

調査期間 平成19年7月9日～24日

調査担当 横山成己・藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図4)

平成18年度、山口大学吉田構内南東端部に所在する農学部附属動物医療センター^北面において新規建物の造築工事が立案された。工事予定地に対して、当館は予備発掘調査及び本発掘調査を実施し、古代の大型掘立柱建物跡等、極めて重要な埋蔵文化財資料を多數確認した。^西

平成18年度末に改修II期工事としてI期工事地の東隣に患畜入院室・診察室を使用目的とする増築建物工事が新たに計画されたため、埋蔵文化財保護のための対応が必要となった。

平成18年度の調査により、II期工事予定地は吉田構内の南東にそびえる今山から北西に向かい舌状に派生する低丘陵上に当たり、現地表面下約0.4

mには遺構が残る地山が検出されることは明らかであった。本学開発部局と設計変更による保護処置を検討したが、I期改修で建築した増築建物との関係から、盛土等でフロアに段差が生じることは病院建物という性格上好ましくないとの見解が提示された。最終的に、本学埋蔵文化財資料館専門委員会にて「発掘調査による埋蔵文化財の記録保存」の判断が下されたため、開発予定地に対し発掘調査を実施する運びとなった。

(2) 調査の経過

改修I期工事に伴う本発掘調査成果により、動物医療センター南面は既存建物壁より南方に約5mもの範囲で大きく搅乱を受けていることが判明した。よって今回は掘削範囲を最小限に止めるため、開発予定地南端から南北4m×東西12mの範囲で調査を実施することとした。調査経過の概略は以下の通りである。

7月9日より重機掘削を開始し、7月11日には遺構の検出を終了。7月12日より遺構の半裁掘削および記録作業を行い、7月18日までに遺構を完掘した。その後、写真撮影、測量を実施し、7月23日には記録に関する全ての作業を終了。7月24日に調査区の埋め戻しを行い、調査を完了した。改修I期工事に伴う本発掘調査同様、梅雨時の調査となつたため、雨天によりしばしば調査を中断したが、概ね順調な作業工程であった。

(3) 基本層序(図5、写真11～12)

調査地現地表面の標高は約30mを測るが、東から西に向かい僅かに降下している。基本層序は、調査区西部においては



図4 調査区位置図

第1層…碎石（層厚約5cm）

第2層…造成土（層厚約20cm）

第3層…黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土（層厚約5cm）～旧耕土

第4層…灰黄色（2.5Y5/1）粘質土に砂粒混ざる（層厚約10cm）～旧床土

第5層…ぶい黄褐色（10YR4/3）砂礫土～遭構検出層（地山）

となっている。一方、調査区東部では造成土直下が地山となっているが、これは本地には旧来棚田が営まれており、山口大学移転時に高所を削平し低所を埋め立てる工法により平地を確保したことによるものである。旧耕土が残る調査区西部の地山が砂礫層であるのに対し、東端部では明黄褐色（10YR6/6）の岩盤風化層が露出していることも、大学造成時に上位の棚田が大幅に削平を受けたことを物語っている。

検出した地山面は、北東から南西に向かい緩やかに降下している。これは、旧来この地が調査地点の南西を南東～北西方向に走る谷部に向かい降下する微傾斜地であったことを反映するものであろう。

（4）遭構（図5・6、写真7～10）

調査前の予測通り、動物医療センター既存建物の約5m南方まで基礎堀方が及んでおり、調査区内で旧地形をある程度留めていたのは調査区東部で南北幅約3.2m、西部で南北幅約2mの範囲に限定された。また、調査区西端部は既存の配管により搅乱を受けている。

検出された遭構は、土壤3基、P i t 28基であり、以下に個別解説を記す。

土壤1

調査区の北西端部に位置する。検出当初は土質から搅乱坑と判断したが、埋土中に近現代に所属する資料も見られないため、ここでは遭構として報告を行う。

平面的には不整円形の南東部を1/4残した形状を呈しており、北部は建物堀方により、西部は配管堀方により破壊されている。現況で東西幅約1.6m、南北幅1.4mを測る。遭構肩部より緩やかに傾斜して北西隅の底面最深部に至るが、その深さも0.13mを測るに過ぎない。遭構埋土は褐灰色（10YR5/1）弱粘質土に1～3cmφの礫が少量混ざっている。

出土遺物はいずれも土器資料であり、須恵器61点、土師器12点、瓦質土器体部片の可能性がある小片7点を数える。実測可能資料は須恵器に限られ、いずれも細片である。須恵器を観察する限りでは9世紀後半を中心とする時期を考えたいが、瓦質土器状の小破片の存在から中世にまで降る遭構である可能性が残る。

土壤2

調査区中央やや東寄りの南壁側で検出された。ここでは土壤としたが、平面不整梢円形の浅い落ち込み状の遭構であり、南壁土層断面第3層（造成土2）により南側を掘り込まれている。

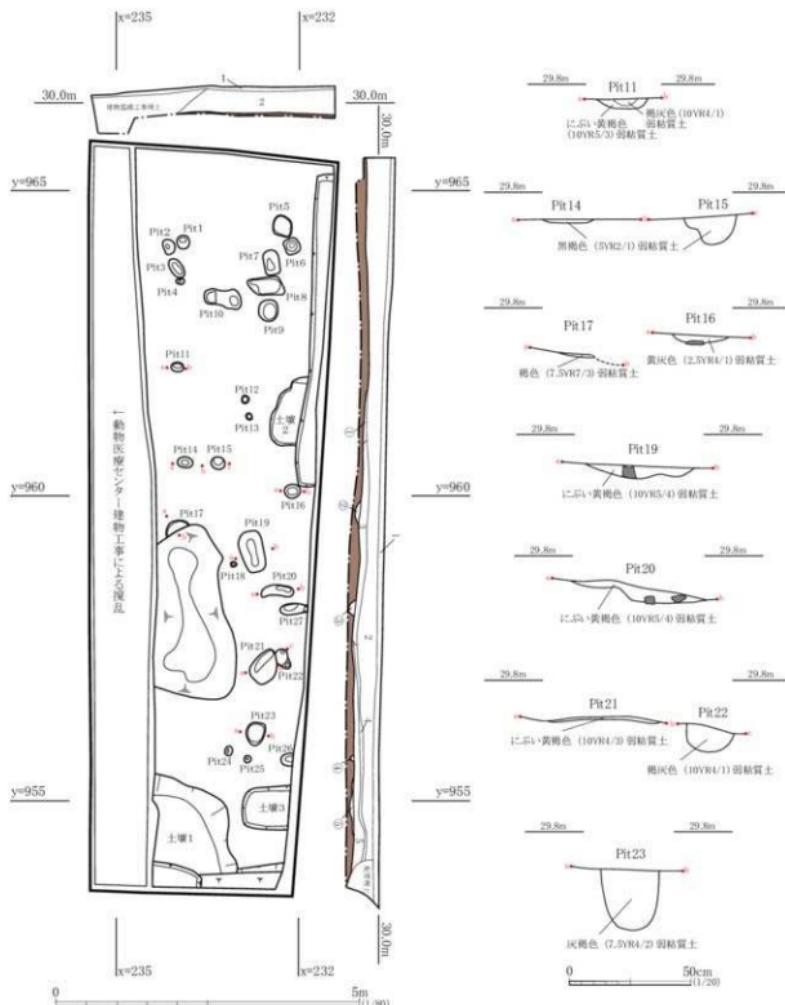
埋土からは近世から近代のものと思われる平瓦の小片が出土しており、過去に形成されていた棚田に関わる施設であった可能性が高い。

土壤3

調査区西部の南壁側に位置する。現状で南北を主軸とする隅丸長方形を呈しているが、南側は調査区外となるため遭構の全形は不明である。現状で東西幅約0.7m、南北幅約0.8mを測る。底面中央が南北方向に一段下がっているが、埋土は均一であった。

出土遺物は極少量であり、須恵器片3点、瓦質土器釜口縁部片1点を数えるのみである。後者の存在から遭構の形成時期は中世、14世紀以降に求められる。

吉田構内(古田遺跡)の調査



- 1 鉢石
- 2 造成土1
- 3 造成土2
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土…旧耕土
- 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土に0.5～3cmφの礫が混ざる…旧床土
 - ① にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土…土壤2埋土
 - ② 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土…Pit28 埋土
 - ③ 灰黄褐色 (10YR5/2) 弱粘質土…Pit27 埋土
 - ④ 灰黄褐色 (10YR4/2) 弱粘質土…Pit26 埋土
 - ⑤ 灰色 (5Y4/1) 弱粘質土に0.5～4cmφの礫が少量混ざる…土壤3埋土

図5 調査区平面図・断面図

図6 遺構断面図

Pit群

調査区全面にわたり総数28基のPitが確認された。この内、調査区東部で確認したPit 1～10は、埋土が旧耕土及び床土と同様であり、Pit 8には内部にコンクリート片が埋存していた。大学造成の際に何らかの工法のため上層土が押し込まれたものと判断している。

その他のPitに関しては、調査範囲が狭小であるため、建物跡等を復元できる状況はない。出土遺物に関しては、Pit 15から須恵器1点、土師器4点が、Pit 23から須恵器2点、土師器8点が、Pit 27から須恵器1点、土師器2点が出土しているに過ぎない。土壤の遺物相を考慮すると、各Pitの安易な時期比定は控えるべきと考える。



写真7 遺構検出状況 (北西から)



写真8 遺構完掘状況 (北西から)



写真9 遺構完掘状況 (西から)



写真10 遺構完掘状況 (東から)



写真11 調査区南壁西端部土層断面 (北西から)



写真12 調査区南壁東端部土層断面 (北から)

（5）遺物（図7・8、写真13・14・15、表2）

当調査において遺構および遺物包含層から出土した資料はいずれも土器の細破片であり、口径・底部径等の復元は不可能なものばかりである。

土壙1からは総数80点土器が出土している。土師器、須恵器、瓦質土器の可能性がある体部の小片であるが、図示可能なものはいずれも須恵器である。**1~3**は蓋口縁部。**2・3**は口縁端部を下に摘み出し丸く収めている。**4~6**は坏身口縁部。内湾するもの（**4**）と外反するもの（**5**）、直線的に立ち上がるるもの（**6**）とが混在する。**7~9**は坏身底部。体部が直線的に立ち上がるもの（**7**）と大きく外に開くもの（**8・9**）がある。**10・11**は高台付坏身の底部。いずれも高台が底部外端部に近い位置に貼り付く。**12~14**は蓋口縁部か。ナデにより内端部に段が形成されるもの（**13・14**）と平坦なもの（**12**）とがある。

土壙3からは総数4点の土器片が出土しているが、図示可能なものは須恵器1点と瓦質土器1点である。**15**は須恵器高台付坏底底部。体部および高台内端部を欠失している。**16**は瓦質土器羽釜口縁部。やや内傾する口縁端部外面直下に突帯を巡らせるものである。内外面とも炭素吸着が甘くほぼ土師質焼成となっている。

P i t 15からは須恵器1点・土師器4点が出土しているが、図示可能なものは須恵器1点のみである。**17**は坏蓋口縁部。端部を下に摘み出し、尖り気味であるが丸く収めている。天井部へはくびれを持たずドーム状に持ち上がる。

旧床土からは総数69点の土器片が出土している。内訳は須恵器57点、土師器5点、瓦質土器6点、磁器1点であるが、図化しうるものは須恵器11点、土師器1点に過ぎない（**18~29**）。須恵器にはかえりをもつ坏蓋口縁部（**18**）も見られるが、概ね8世紀後半以降の資料である。

旧耕土に関しては、重機掘削時に部分的に下位の旧床土まで削ったため、2層に包含される遺物を混在して取り上げている。総数150点の土器片が出土しており、この内須恵器17点、瓦質土器3点、青磁1点を図示している（**30~50**）。須恵器には坏蓋天井部および口縁部（**30~35**）、坏身底部（**41**）、高台付坏身底部（**42~44**）、高坏脚端部（**45**）、高台付壺底部（**46**）、瓦質土器には足錐脚部（**47・48**）、擂鉢（**49**）、青磁碗口縁部（**50**）がある。この内、須恵器坏蓋つまみ（**31**）は扁平化した偽宝珠形を呈す。吉田遺跡では出土例が少ないタイプであり、注目される。また、扁平なボタン状つまみを有する坏蓋（**30**）の内面には「×」字状のヘラ記号が施されている。

調査区中央部西寄りで確認された搅乱坑からも須恵器8点、瓦質土器2点が出土している。ここでは須恵器坏身底部（**51**）、瓦質土器鍋口縁部（**52**）、脚部（**53**）を図示しておく。

（6）小結

当調査区は、平成18年度に実施した家畜病院改修Ⅰ期工事調査区の東に接する位置にあたる。18年度調査区の西部には古代の遺物を多量に包含する埋没谷が存し、その傾斜面には大型のものを含め掘立柱建物が3棟存在することなどが確認された。今回の調査では、さらに東方へ遺構が分布することが判明したが、調査範囲が狭小であることから遺構の性格は不明確である。出土遺物に関しても、古代の須恵器資料が主体を占めるが、遺構埋土内には瓦質土器状の小破片も混在しており、各遺構の所属時期も不明と言わざるを得ない。周辺域での今後の調査でこれらの課題を解決する必要がある。

[註]

- 1) 平成19年1月1日に農学部附属家畜病院から山口大学動物医療センターに改称。
- 2) 横山成己・藤野好博（2010）「第1章第2節2. 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口

古田橋内（古田遺跡）の調査

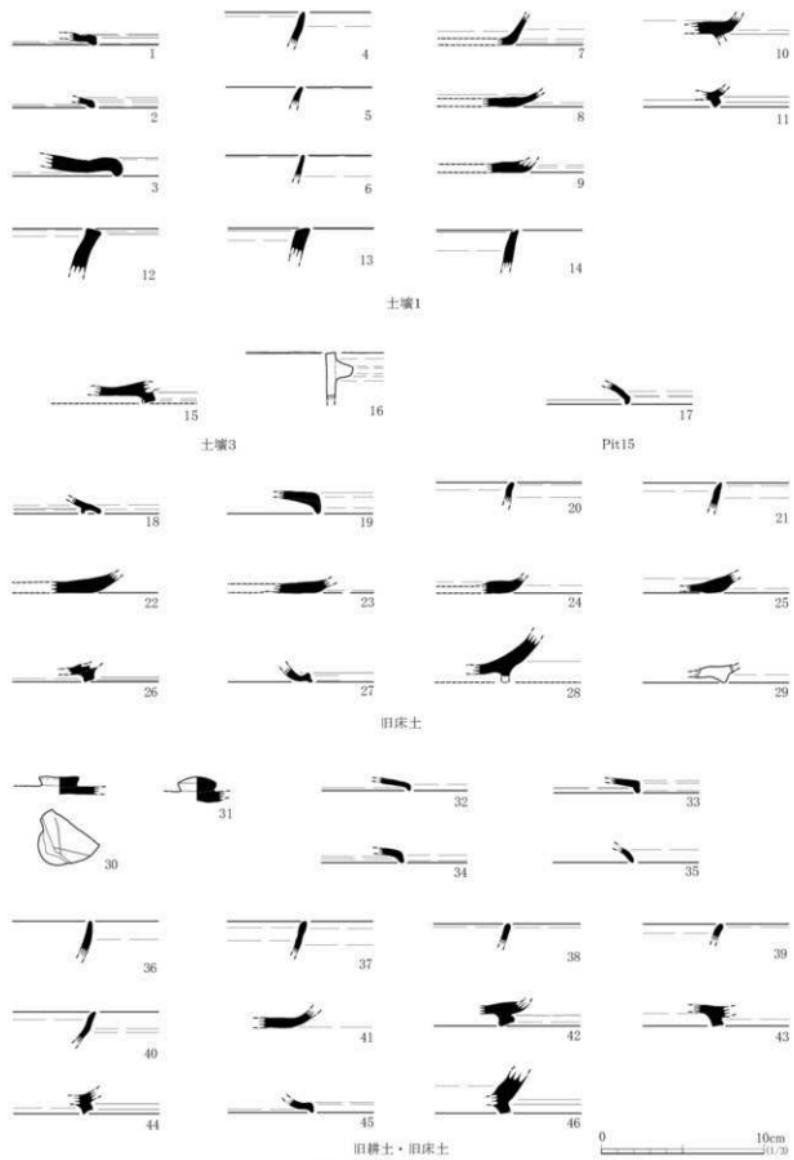


図7 出土遺物実測図①

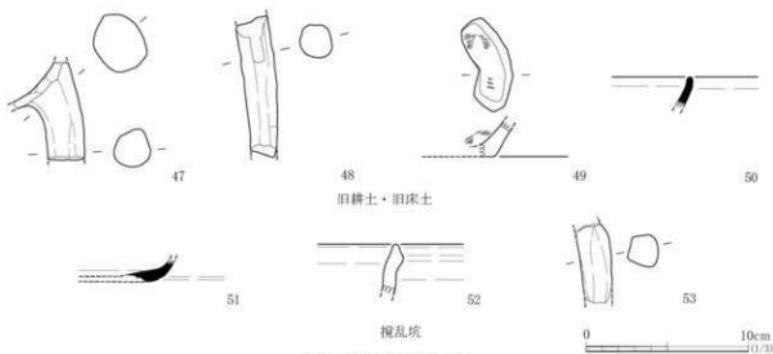


図8 出土遺物実測図②

表2 出土遺物観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	土壤1埋土	須恵器 壁蓋	口縁部		①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mmφ以下の粗粒砂を少く含む	
2	土壤1埋土	須恵器 壁蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
3	土壤1埋土	須恵器 蓋	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	3mmφ程の礫を少く含む 1mmφ以下の粗粒砂を少く含む	風化が目立つ
4	土壤1埋土	須恵器 壁身か	口縁部		①灰白色(N7) ②青灰色(5PB6/1)	1mmφ以下の粗粒砂を含む	
5	土壤1埋土	須恵器 壁身	口縁部		①②灰白色(N5)	1mmφ以下の粗粒砂を含む	
6	土壤1埋土	須恵器 壁身	口縁部		①暗青灰色(5B4/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mmφ以下の粗粒砂を含む	
7	土壤1埋土	須恵器 壁身	底部		①②灰白色(N6)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
8	土壤1埋土	須恵器 壁身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	2mmφ程の礫を少く含む 1mmφ以下の粗粒砂を含む	
9	土壤1埋土	須恵器 壁身	底部		①②灰白色(N7)	3mmφ程の礫を少く含む 1mmφ以下の粗粒砂を含む	
10	土壤1埋土	須恵器 高台付壁身	底部		①暗青灰色(5B4/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
11	土壤1埋土	須恵器 高台付壁身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
12	土壤1埋土	須恵器 瓢	口縁部		①②灰白色(N6)	1mmφ以下の粗粒砂を少く含む	
13	土壤1埋土	須恵器 瓢か	口縁部		①灰白色(N8) ②暗青灰色(N3)	2mmφ程の礫を多く含む 1mmφ以下の粗粒砂を少く含む	
14	土壤1埋土	須恵器 瓢か	口縁部		①青灰色(5PB5/1) ②暗青灰色(5B4/1)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
15	土壤3埋土	須恵器 高台付壁身	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
16	土壤3埋土	瓦質土器 羽釜	口縁部		①褐色(10YR6/1) ②明黄褐色(2,5Y6/6)	2mmφ程の礫を含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい
17	Pit15埋土	須恵器 壁蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	
18	旧耕土	須恵器 壁蓋	口縁部		①②灰白色(N8)	精緻	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口徑②底径③器高			色調 ①外顔 ②内顔	胎土	備考
				①	②	③			
19	旧床土	須恵器 蓋	口縁部		①②灰白色(N7)		2mmφ 程の礫を少量含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
20	旧床土	須恵器 环身	口縁部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
21	旧床土	須恵器 环身	口縁部		①暗青灰色(SB4/1) ②青灰色(5B4/1)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
22	旧床土	須恵器 壺	底部		①明黄褐色(10YR7/6) ②灰白色(N8)		精緻	風化が著しい	
23	旧床土	須恵器 壺	底部		①②灰白色(N7)		2mmφ 程の礫を少量含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
24	旧床土	須恵器 壺	底部		①②青灰色(5PB6/1)		2mmφ 程の礫を多く含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
25	旧床土	須恵器 壺	底部		①②灰白色(N8)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む 風化が著しい	目立つ	
26	旧床土	須恵器 高台付环身	底部		①②青灰色(5B6/1)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
27	旧床土	須恵器 壺蓋	口縁部		①②明青灰色(PB7/1)		2~3mmφ 程の礫を極少含む 1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
28	旧床土	須恵器 高台付壺か	底部		①青灰色(5B5/1) ②青灰色(5PB5/1)		2mmφ 程の礫を極少含む		
29	旧床土	土師器 高台付壺か	底部		①灰白色(10YR8/2) ②にぶい褐色(10YR7/2)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む 1mmφ以下の粗粒砂を少々含む	風化が著しい 内面にヘア記号	
30	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋	つまみ	つまみ径2.5cm	①②明青灰色(PB7/1)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
31	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋	つまみ	つまみ径2.4cm	①②灰色(N6)		1mmφ以下の粗粒砂を極少含む		
32	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を含む		
33	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)		1mmφ以下の粗粒砂を含む		
34	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰白色(N7)		精緻		
35	旧耕土 旧床土	須恵器 壺蓋か	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
36	旧耕土 旧床土	須恵器 壺か	口縁部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む 風化が目立つ		
37	旧耕土 旧床土	須恵器 壺か	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)		2mmφ 程の礫を少々含む		
38	旧耕土 旧床土	須恵器 壺か	口縁部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む 風化が目立つ		
39	旧耕土 旧床土	須恵器 壺か	口縁部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
40	旧耕土 旧床土	須恵器 高窓か	口縁部		①②明青灰色(PB7/1)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
41	旧耕土 旧床土	須恵器 环身	底部		①②灰色(N6)		2mmφ 程の礫を極少含む 1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
42	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付环身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
43	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付环身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)		2mmφ 程の礫を少々含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
44	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付环身	高台		①②青灰色(5PB6/1)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
45	旧耕土 旧床土	須恵器 高窓	脚部		①灰色(N6) ②灰色(N4)		2mmφ 程の礫を少々含む		
46	旧耕土 旧床土	須恵器 高台付壺か	底部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む ランバンが多く含む		
47	旧耕土 旧床土	瓦質土器 足繩	脚部		①灰白色(N7) ②灰白色(5Y7/1)		2mmφ 程の礫を少々含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
48	旧耕土 旧床土	瓦質土器 足繩	脚部		①②灰色(5Y4/1)		2mmφ 程の礫を多く含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む		
49	旧耕土 旧床土	瓦質土器 鉢	底部		①灰色(N4) ②灰色(N5)		1mmφ以下の粗粒砂を多く含む 風化が目立つ		
50	旧耕土 旧床土	青磁 梗	口縁部		素地 灰白色(5Y8/1) 釉 オリーブ灰(2.5GY6/1)		精緻		
51	擾乱坑	須恵器 环身	底部		①②灰白色(N7)		1mmφ以下の粗粒砂を少々含む		
52	擾乱坑	瓦質土器 鉢	口縁部		①暗褐色(N3) ②灰白色(N7)		2mmφ 程の礫を少々含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい	
53	擾乱坑	瓦質土器 足繩	脚部		①浅黄色(2.5Y8/3) ②浅黄色(2.5Y7/4)		2mmφ 程の礫を多く含む 1mmφ以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい	

古田構内（古田遺跡）の調査



写真 13 出土遺物①

古田橋内（古田遺跡）の調査



写真 14 出土遺物②

古田橋内（古田遺跡）の調査



旧耕土・旧床土



旧耕土・旧床土

搅乱坑

写真 15 出土遺物③

2. 駐車場整備工事に伴う立会調査



図9 調査区位置図



写真 16 掘削の模様（北西から）

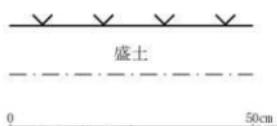


図 10 土層断面模式図

調査地区 吉田構内 J-21区

調査面積 約10m²

調査期間 平成19年6月15日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内駐車場整備工事に伴い、経済学部校舎南側道路植樹帯の一部に地下の掘削が計画された。予定された掘削深度は0.2mと極めて浅いものであったが、計画地の北東に隣接する経済学部校舎新営に伴う試掘調査では、大学造成時の盛土が0.1～0.4mであり、下位に旧耕土以下堆積層が確認されているため、立会調査を実施する運びとなった。

実際の工事においては、既存埋設管が予想より浅く検出されたため、造成土内0.1mが掘削されるに止まった。

本調査地点の北東約50mには、微高地上に形成された弥生時代中期から終末期にかけての集落跡が確認され、現在「遺跡保存公園」という名称で埋め戻し保存されている。集落が営まれた微高地がどの範囲に広がるのか未だ解明されていないことから、今後とも周辺地での開発工事等の計画に對して慎重に対応する必要がある。

【註】

- 1) 河村吉行 (1992) 「第3章昭和55年度山口大学構内の発掘調査 第1節吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大学構内遺跡調査研年報 X』, 山口

3. 資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-20・21区

調査面積 約550m²

調査期間 平成19年6月25日・26日

調査担当 横山成己

調査結果 平成18年に吉田構内経済学部商品資料館北側空闊地に資料館（東亜経済研究所）の新営工事が計画されたことを受け、同年12月5日～翌年1月10日にかけて予備発掘調査が実施された。

建物建設予定地2カ所に調査区（西側調査区：東西幅2m×南北幅28m、東側調査区：東西幅2m×南北幅22m）を入れ調査を行った結果、第1層：造成土、第2層：旧耕土、第3層：旧床土、第4層：旧床土ないし耕土、第5層：河川堆積土、第6層：地山という基本層序が確認された。検出された遺構には、第2層および第4層を検出面とする水田暗渠や、第5層を検出面とする落ち込みや土壤などがある。いずれの遺構からも目立った遺物は出土しておらず、埋土の質からこれらは河川堆積土または水田耕作に伴う遺構と推察されたため、開発予定地全域を対象とする本発掘調査は不必要と判断されたが、慎重を期して基礎掘削工事時に立会調査を実施する運びとなった。

立会調査は、平成19年6月25・26日の両日にかけて実施した。総掘削面積は約550m²に及ぶため、予備発掘調査で地下の様相を確認し得なかった開発域の東端部（地点1）と西端部付近（地点2）2カ所で層位の確認を行った。

地点1では、第1層：造成土（層厚0.5m）下に第2層：旧耕土（層厚0.25m）、第3層：旧床土（層厚0.2m）、第4-1層：旧耕土（層厚0.1m）、第4-2層：旧床土（層厚0.15m）、黒褐色粘質土層（層厚0.25m）、第5-1層：青灰色細シルト・河川堆積層（層厚0.2m）、第5-2層：青灰色粗シルト・河川堆積層（層厚0.15m）、第5-3層：暗青灰色砂礫・河川堆積層（層厚0.1m）、第6層：青灰色強粘土層（地山）が確認された。これらは予備発掘調査で確認された基本層序とほぼ同一であり、第5層上位に確認された黒褐色粘質土層は落ち込み埋土であろう。

一方地点2では、第1層：造成土（層厚0.6m）下に第2層：旧耕土（層厚0.2m）、第3層：旧床土（層厚0.25m）、第4-1層：旧耕土（層厚0.15m）、第4-2層：旧床土（層厚0.1m）、第4-3層：灰黄混じりの粘性砂層（層厚0.15m）、黒褐色粘質土層（層厚0.05m）、第6層：青灰色強粘土層（地山）となっていた。

予備発掘調査の成果と合わせて当該地の土地活用の変遷を考えると、造成土下に存する耕作土は昭和40年代初頭より開始した本学の吉田の地への統合移転以前の状況を示すものであり、さらに下位



図11 調査区位置図



写真17 基礎工事掘削の模様（東から）



図 12 土層断面観察地点1模式図



図 13 土層断面観察地点2模式図

に形成されている旧耕土・床土の存在は、この地が長期間にわたり水田であったことを物語っている。江戸時代中頃、18世紀前半に描かれた地下上申絵図「吉田村」と現在の吉田構内を照合すると、当時は本部棟周辺と農学部附属農場本館建物南方に農村集落が形成されており、周囲一帯は水田であったものと推察される。吉田構内各地における発掘調査成果もその事実を裏付けており、少なくとも本学統合移転前の吉田の景観は18世紀前半には既に成立していたものと理解して良かろう。

一方でそれ以前の当該地の歴史的景観は甚だ不明瞭である。予備発掘調査と今回の立会調査で確認された土層からは、耕作地開発以前は本地が河川堆積地であったこと以外の情報が得られていない。耕地化に伴い、河川堆積土上、あるいは高所部分を削平した上に床土が敷かれたのであるが、それが何時のことなのかは各層に遺物が含まれない現状では解明する術を持たない。

経済学部校舎周辺では空閑地も減少しており、今後開発に伴う発掘調査等で新知見を得る可能性も低まっている。より広域の地下の状況に目を向げ、上記の問題の解明に務めなくてはならない。

〔註〕

- 1) 田畠直彦 (2010) 「第1章第2節6. 資料館（東亞經濟研究所）新営工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口

4. 第一事務局庁舎改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-15区

調査面積 約5m²

調査期間 平成19年11月7日

調査担当 田畠直彦

調査結果 第一事務局庁舎改修工事に伴い、正面入口前に階段と銘板の設置が計画された。工事は同庁舎玄関正面に階段、東側に銘板を設置するものである。同庁舎敷地では統合移転の際、山口大学吉田遺跡調査団による発掘調査で堅穴住居、溝、土壙が検出されたとされ、埋蔵文化財資料館には同庁舎敷地から出土した弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器などの遺物が保管されている。このため今回の工事に伴い、工事施工時に立会調査を行った。

工事による掘削は階段設置箇所が現地表下約20cm、銘板設置箇所が現地表下約74cmであった。調査の結果、いずれも造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

今回の工事では埋蔵文化財は確認されなかつたが、調査区周辺では構造・遺物が存在している可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

〔註〕

- 1) 小野忠熙編（1976）、山口大学吉田遺跡調査団（編）『吉田遺跡
発掘調査概報』山口



図14 調査区位置図



写真20 調査区全景（南西から）



写真21 調査区東端土層断面（北から）

5. 吉田寮前排水管敷設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内M-11区

調査面積 約11m²

調査期間 平成20年1月10日、1月15日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉田寮南側の道路に排水管敷設工事が計画された。工事は実験水田埋立地の東側に新設するビオトープに水を引くため、排水管を新設するもので、管路（A地点）は現地表下約70cm、樹設置場所（B地点）は現地表下約130cmの掘削を行うものであった。



図 15 調査区位置図



写真 22 A地点土層断面（南東から）

層を検出した。以上により、調査区周辺においては今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔註〕

- 1) 豆谷和之（1995）「付篇Ⅰ 吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XIII』、山口
- 2) 河村吉行（1988）「第5章第1節4 農学部附属農場E7圃場排水管理設およびE6圃場進入路拡幅に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』、山口

6. 農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q-15、S-18区

調査面積 約0.5m²

調査期間 平成19年3月17日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内農学部附属農場敷地2ヶ所（A地点・B地点）に電柱を設置する計画が立案されたことを受け、立会調査を実施することになった。掘削規模はそれぞれ直径0.5m×1mである。以下に両地点の調査成果を報告する。

【A地点】（図17、写真23）

工事計画地の南に隣接する地点で実施された農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡の柱穴列と推定される土壙群が確認されており、出土遺物から7世紀前半に所属時期が求められている。また、地山（遭構検出面）直上の造成土中からも7世紀から8世紀にかけての土器が多数出土しており、周辺一帯に古代の集落間遭構が分布している可能性が指摘されている。

工事掘削は、施工業者の協力を受け人力により慎重に行なった。調査の結果、本地点の層序は①表土及び造成土（層厚約0.7m）、②旧耕土（層厚約0.05m）、③旧床土（層厚0.2m以上）であった。遺物については、造成土内から須恵器甕の体部片が2点出土している。

上述した農業環境観測実験施設調査区では、旧耕土下に遭構検出面が存在しており、本調査地まで遭構が分布する可能性は極めて高いと言える。さらに西方約75m地点で実施した第2学生食堂増築及び改修工事に伴う発掘調査では、南東から北西に走る平安時代の大溝と、その東に同一時期のものと



図16 調査区位置図



写真23 A地点土層断面 (南西から)



表土

造成土

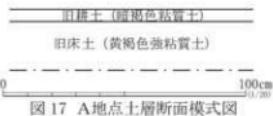


図17 A地点土層断面模式図



写真24 B地点土層断面 (北から)

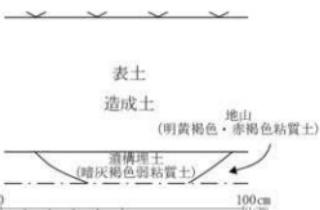


図18 B地点土層断面模式図

推測される掘立柱建物跡群が確認されている。吉田遺跡東部丘陵台地における古代集落の形成状況には未だ不明確な部分が多く、周辺地の土地掘削に際しては慎重な対応を要する。

【B地点】(図18、写真24)

農学部附属農場果樹園のほぼ中央部分にて実施した。果樹園内であるため、周辺地での調査歴は限られているが、調査地の南西約40m地点で実施した農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査では、古代の遺物を包含する河川跡とともに掘立柱建物跡群が確認されており、周辺に古代官衙関連施設が存在する可能性が指摘されている。

立会調査の結果、本地点の層序は①表土及び造成土（層厚約0.4m）、②明黄褐色・赤褐色粘質土（地山）であった。また、地山を掘り込む柱穴と推定される遺構も確認された。遺構埋土は暗灰褐色粘質土であり、中世以降の遺構埋土である可能性が高い。遺物は出土していない。

従来より、農学部附属農場敷地には広く埋蔵文化財が分布している可能性が指摘されていた。今回立会を実施した2地点での調査成果は、その可能性を更に高める結果となっている。今後とも農学部附属農場敷地内での地下の掘削を伴う工事計画等には十分な埋蔵文化財保護措置が必要である。

【註】

- 1) 河村吉行 (1992)「付篇I 第3章昭和55年度山口大学構内の発掘調査 第2節吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口
- 2) 田畑直彦 (2004)「第8章平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3) a:田畑直彦 (2002)「山口大学構内吉田遺跡—農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報ー」,山口考古学会 (編)『山口考古第22号』,山口
b:田畑直彦 (2004)「第8章6. 平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口

第3節 白石構内（白石遺跡）の調査

1. 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う予備発掘調査

調査地区 白石構内

調査面積 約121m²

調査期間 平成19年6月13～7月3日

調査担当 田畠直彦

調査結果

(1) 調査の経緯

教育学部附属山口中学校で校舎等改修その他工事が計画された。工事は山口中学校校舎にエレベーターとスロープを設置し、設備配管を新設するものである。今回工事が計画された校舎周辺においては、平成2年度の汚水排水管布設に伴う発掘調査で繩文時代晚期の遺物包含層や弥生時代終末期の遺物包含層・溝状遺構などが検出されている。このため今回の工事箇所についても、上記に関連する遺構・遺物の検出が予想された。

このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示のもと、(発掘調査をする工事計画として、平成18年3月16日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行った。なお、エレベーター設置箇所は建物に隣接していることから、建物工事および既設配管による掘削で搅乱されていることが予想されたため、立会調査を行うこととし、スロープ設置箇所及び新設の配管工事箇所を対象として予備発掘調査を行った。

(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(1-1～2に細分、層厚約10～20cm)

第2層 造成土(2-1～2に細分、層厚約10～20cm)

第3層 耕土もしくは床土(3-1～5に細分、層厚約10～30cm)

第4層 河川埋土(4-1～26に細分、層厚120cm以上)

調査による掘削深度は、スロープ設置箇所では工事掘削レベルである現地表下約60cm(標高27.8m)までにとどめた。また、配管工事箇所では調査区南部で現地表下約70～130cm(標高約27.1～27.7m)、その他の箇所では最大で現地表下約150cm(標高約26.9m)まで掘削を行った。

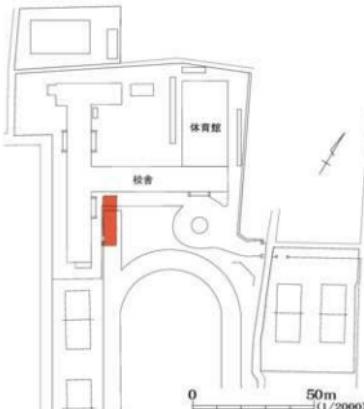


図 19 調査区位置図



写真 25 調査前全景（北から）

白石構内(白石遺跡)の調査

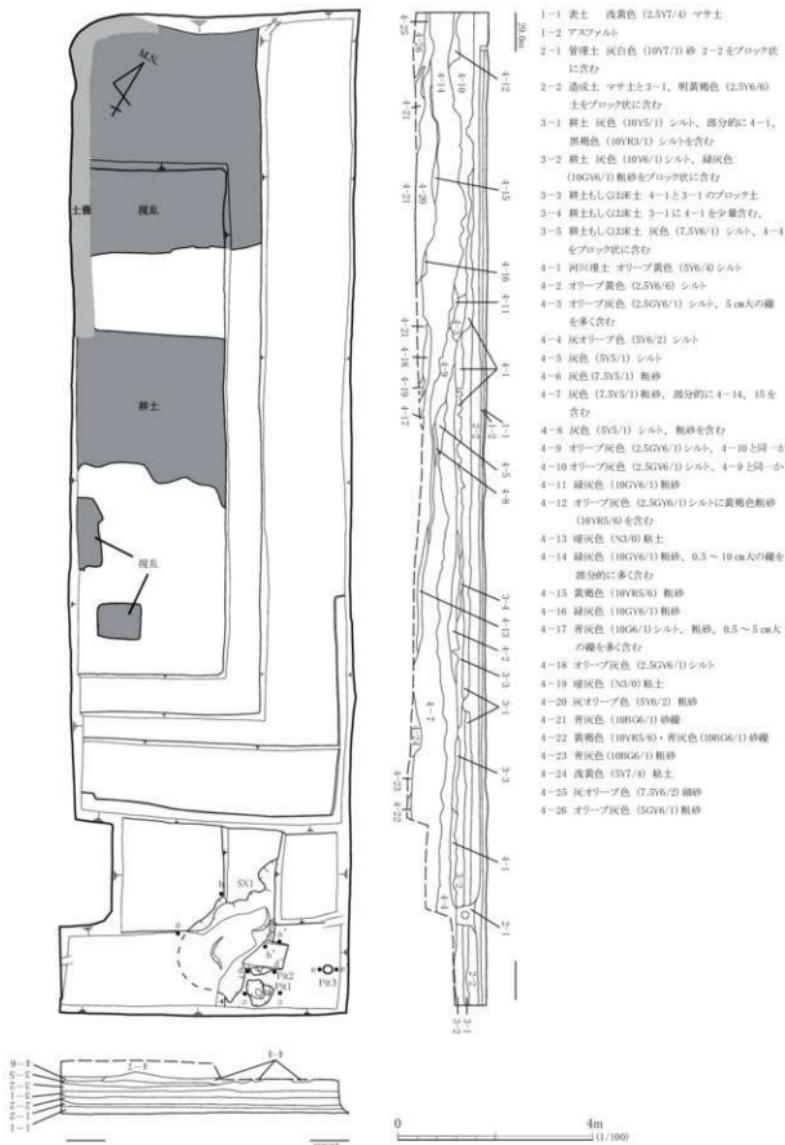


図20 調査区平面図・断面図

白石構内(白石遺跡)の調査

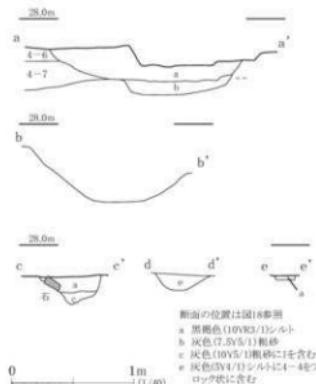


図 21 調査区造構断面図

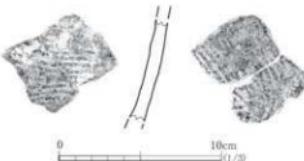


図 22 出土遺物実測図



写真 26 出土遺物

調査区中央～南部では第1層、第2層の直下で第3層が検出された。第3層は近世～近代の水田耕作に関わる土層である。耕土と床土を明確に識別できなかったが、いずれも第4層もしくは黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含んでいた。黒褐色シルトは造構ないし遺物包含層埋土と考えられ、同層には調査区南部を中心に弥生土器・土師器片・中世の瓦質土器片を含むことを確認した。従って、近世～近代の水田整備により、造構及び包含層が削平されたと考えられる。第4層は縄文時代以前の河川堆積土と考えられる。第4層の上位は弥生時代以降の造構面で、調査区の南部では第4-4層〔灰オリーブ(5Y6/2)シルト〕で弥生～古墳時代の造構が検出された。第4層の下位が砂礫・粘土層で、調査区北部の第14-4層から縄文土器片1点が出土した。なお、第4-19層～4-26層は上層よりもやや硬くしまりがあるため、縄文時代でも時期はさらに遡る可能性がある。

(3) 造構

調査区北端部は校舎建築時に伴うものと考えられる搅乱が著しかった。これより南のスロープ設置箇所では掘削深度を現地表下約60cmにとどめたため、中央部に耕土(第3-1層)が残り、第4-1層、4-2層を検出面として搅乱を検出したのみである。一方、調査区南部では落ち込み1基(SX1)、ピット3基を検出した。なお、SX1とPit 2については、排水管により一部が破壊されていたほか、機械掘削中に同管が破裂して排水が大量に溢れたため、造構の一部が崩れてしまい、完全な形状で検出することができなかった。SX1は最大幅約264cm、長さ270cm以上、深さ41cm。Pit 1の平面規模は54cm×62cm、深さ22cm。Pit 2はd-d'間が46cm、深さ14cm。Pit 3は直径19cm、深さ4cm。SX1は北・南端部を欠いており、また調査区壁面においても断面は確認できていないが、埋土の下層が灰色(7.5Y5/1)粗砂であることから、本来は溝であった可能性がある。SX1、Pit 1～3からは弥生土器ないし土師器と考えられる土器片が出土しているが、細片であるため詳細な時期は判別できなかった。

(4) 遺物

第4-14層から縄文土器片1点、第2・3層から中世の瓦質土器片、近世～近代の陶磁器片、本来は包含層・造構に含まれていたと考えられる弥生土器・土師器片が出土した。造構に伴うものとして、SX1・Pit 1～3からは弥生土器ないし土師器と考えられる土器片が出土したほか、Pit 1からはスラグの

白石構内（白石遺跡）の調査



写真 27 調査区全景 1 (西から)



写真 28 調査区全景 2 (東から)



写真 29 調査区東壁土層断面 (西から)



写真 30 調査区南壁土層断面 (北西から)



写真 31 調査区南部遺構検出状況 (北東から)



写真 32 SX 1 土層断面 (北西から)



写真 33 Pit 1、2 半截状況 (北西から)



写真34 Pit3 半裁状況（南東から）



写真35 調査区南部遺構完掘状況（北東から）

細片が1点出土した。図20は第4-14層から出土した縄文時代後～晩期の深鉢胴部片である。外面に左上がり、内面に横方向の2枚貝条痕を施すが、摩滅が著しい。

(5) 小結

今回の準備発掘調査では、弥生時代以降の遺構面よりも下位に堆積した砂礫層から繩文土器深鉢胴部片が1点出土した。平成2年度の汚水管敷設に伴う発掘調査では、A・B区で弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物包含層の下に縄文時代晩期の遺物包含層が堆積しており、地山はA区が「グライ度の高い緑灰色礫」、B区が「緑灰色礫」であった。また、A区では地山を検出面として弥生時代終末期の溝状遺構が1条検出されたほか、今回調査区の南西側に隣接するD区でも「グライ度の高いオリーブ灰色系の地山」を検出面として時期不明の溝状遺構が1条検出された。しかし、今回調査区南部の遺構検出面が標高約27.8mであるのに対して、遺構検出面の標高はA区が約27.5m、D区が約27.4mであり、いずれも造成土の直下が遺構検出面であった。よってA・D区では本来の遺構面は削平されており、検出された遺構面は今回調査の第4層下位に相当する可能性が高い。今後の発掘調査により、弥生時代以降の遺構面以下の土層を精査し、縄文時代晩期の遺物包含層との関係を含め、その形成状況を明らかにする必要がある。

また、今回の調査区南部では弥生時代もしくは古墳時代と考えられる落ち込み1基とピット3基を検出した。近年、中学校敷地の約200m北側、教育学部附属小学校敷地の南側を流れる五十鈴川の砂防工事に伴い山口県埋蔵文化財センターにより行われた発掘調査³⁾では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物包含層・古墳時代中期の河川跡が検出され、白石遺跡に当該期の大規模な集落が存在したことが明らかとなりつつある。中学校敷地においても今後の調査による詳細の解明が期待される。

〔註〕

1) 河村吉行（1992）「第2章 亀山構内教育学部附属山口中学校汚水管布設に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口

2) 前掲註1

3) 小南裕一（2006）「Ⅲ調査の成果」「IVまとめ」、財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター（編）『白石遺跡』、山口

2. 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他の工事に伴う立会調査

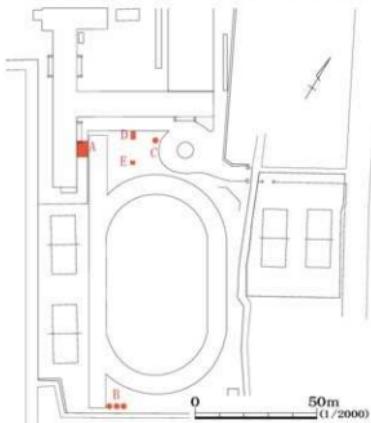


図23 調査区位置図



写真36 A地点東壁土層断面（北西から）



写真37 D地点土層断面（西から）

調査地区 白石構内

調査面積 約38m²

調査期間 平成19年8月6日、10月26、30日

調査担当 田畠直彦

調査結果 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他の工事に伴い、前節の予備発掘調査に続き、A～E地点で立会調査を行った。A地点はエレベータ設置箇所である。校舎建設により大部分が搅乱されていたが、東側の一部で土層を確認した。現地表下約59cmまでが造成土、59～64cmが床土である明黄褐色(10YR7/6)シルト、64cm～140cmが黒褐色(10YR2/2)シルト、灰色(10Y7/1)シルト、灰オリーブ(7.5Y6/2)粗砂からなる河川堆積土であった。B・C地点は樹木移植による掘削である。現地表下約35cmまでを掘削したが、造成土の範囲内であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

D・E地点は排水管の集水井設置に伴い掘削が行われた。D地点では、現地表下約62cmまでが造成土、62～120cmが黄灰色(2.5Y4/1)シルト・灰白色(5Y7/1)粗砂からなる河川堆積土であった。また、現地表下約120cm(掘削底面)で弥生時代以降の遺構面と考えられる橙色(7.5YR6/6)粘土を検出した。なお、灰白色粗砂からは時期不明の土器片1片が出土した。E地点は現地表下約60cmまでが造成土、60～70cmが耕土である灰色(10Y5/1)シルト、70～85cmが床土であるオリーブ灰色(10Y6/2)シルト、85～107cmが遺物包含層と考えられる黄灰色(2.5Y4/1)シルトであった。また、現地表下107cm(掘削底面)で弥生時代以降の遺構面と考えられる灰色(10Y6/1)シルトを検出した。

D地点付近では過去の調査でも河川堆積土と推測される土層が検出されていることから、調査区周辺においては今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔註〕

- 1) 河村吉行 (1987)「第2章第3節 教育学部附属山口中学校部分の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、山口

第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

1. 医学部総合研究棟改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査

調査地区 小串構内総合研究棟南側空閑地

調査面積 6.75m²

調査期間 平成19年8月1日～6日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

（1）調査の経緯（図24）

小串構内において、保健学科研究棟（改修後は総合研究棟と改称）の改修工事が計画された。建物が位置する小串構内北部は、既往の調査により遺物包含層が良好に遺存することが確認されているため、平成18年度第9回埋蔵文化財資料館専門委員会（平成19年3月16日開催）において、改修工事予定地で工事に先立ち予備発掘調査を実施することが承認された。

（2）調査の経過（図25、写真38・39）

調査では、既存建物南側空閑地に1.5m×1.5mの調査区を3ヶ所に設けた。調査区名は、西から順に第1～3調査区としている。

周辺地の調査歴を見ると、当調査地の南西約25m地点で実施した医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査では、造成土下に旧耕土、旧床土が確認されており、その下位に遺物包含層が3層にわたり形成されていることが判明した。^{註1} 最下層の暗青灰色砂層からは、土師器とともに縄文時代後晩期の深鉢底部が出土している。北東約200m地点で実施した医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査でもほぼ同様の層序が得られているため、今回の予備発掘調査では、現地表から旧耕土までの深度を確認することにした。

平成19年8月1日に第1調査区を掘削し、翌2日に第2調査区を、3日は台風5号接近のため作業を中止し、6日に第3調査区を掘削した。いずれの調査区においても旧耕土上面を確認しており、詳細を以下に記す。



図24 調査区位置図



写真38 第2調査区調査前全景（東から）



写真39 第3調査区調査前全景（南から）

(3) 各調査区の層序 (図26、写真40~42)

【第1調査区】

現地表（標高2.95m）下に2層の造成土を確認した。旧耕土である褐灰色（10YR4/1）粘土は現地表下1.45m（標高1.5m）で検出された。旧耕土は0.06~0.09mの厚みを有しており、下位に旧床土である褐灰色（10YR5/1）粘土が存在する。

【第2調査区】

現地表（標高2.89m）下に表土及び3層の造成土を確認した。旧耕土は現地表下1.25m（標高1.64m）で検出された。

【第3調査区】

現地表アスファルト（標高2.73m）下に3層の造成土を確認した。旧耕土は現地表下1.06m（標高1.67m）で検出された。

(4) 小結

3ヶ所に設置した調査区全てで造成土下に旧耕土を確認した。既往の調査から推察すると、旧耕土・床土層の下位に海成砂質土の遺物包含層が存在する可能性は極めて高い。

現在の山口大学小串構内は、宇部市域を南流する真綿川の右岸に面して立地している。この真綿川は、現在ではそのまま南進して河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向か、助田町（現JR居能駅南側）付近を河口としていた。近世文書「舟木宰判本控」には、寛政11年（1799）2月「御届申上候事」として、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第二川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度」との要望書が見られる。要約すると「本川（真

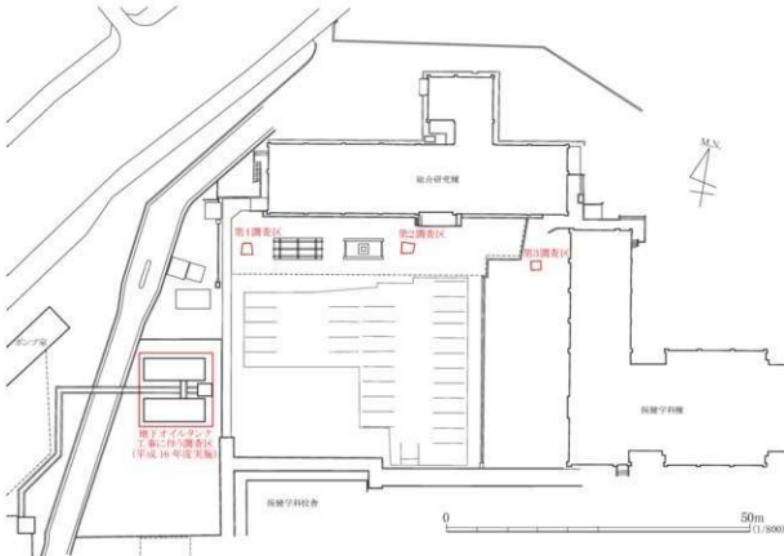


図25 調査区詳細図

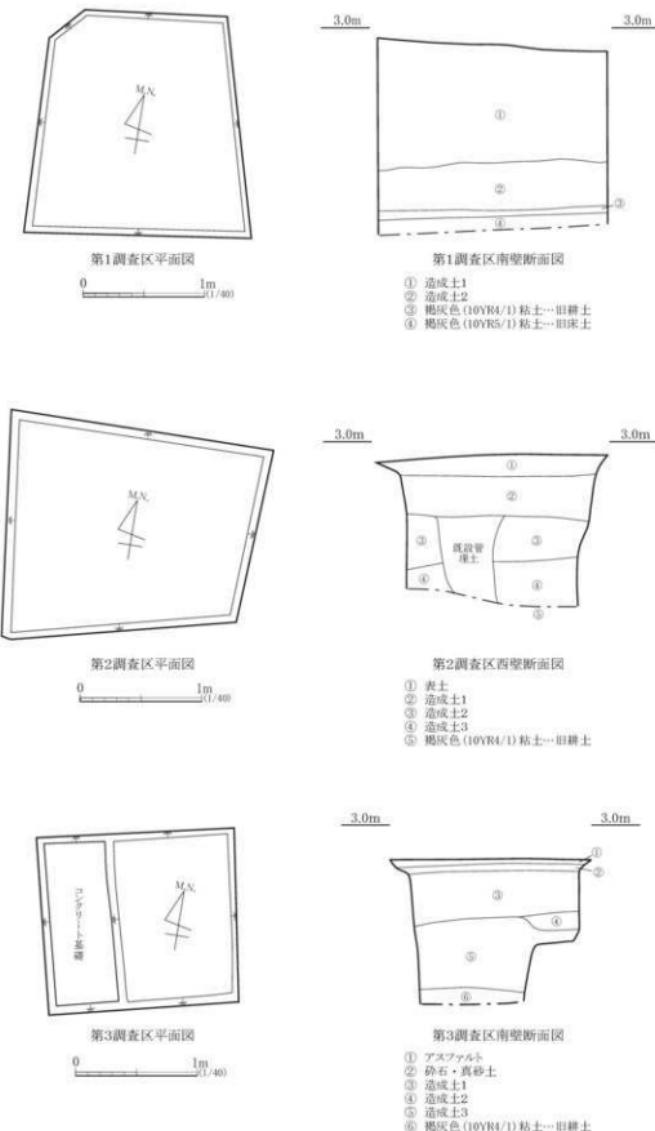


図 26 調査区平面図・断面図



写真 40 第1調査区南壁土層断面（北から）



写真 41 第2調査区西壁土層断面（東から）



写真 42 第3調査区南壁土層断面（北から）

締川) が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせて欲しい」という内容である。この要望は実現し、その後同文書中に「弥永砂共ニ引宜ニ付、只今迄の川おは川尻留被申附候」という記述が見られ、付け替え工事によって川の流れが改善されたので、旧河口を封鎖して周辺地を耕地にしたいと萩藩に願い出ている。

現在の小串構内の地盤高は標高約3mという低地に位置しているが、これまでに構内で確認された旧耕土はいずれも標高約1.5m～1.6mと一定しており、耕土下には平均0.4mの床土が形成されている。その下位には砂を主体とする遺物包含層が幾層にも埋存しているが、この脆弱な地盤で生活が安定的に営まれたとは考え難い。

これらの状況は「舟木宰判本控」に所収されている文書の内容に一致しており、小串構内周辺は少なくとも19世紀初頭までは集落、田畠等が形成される環境下になかったものと推測される。

旧床土下に包含される遺物に関しては、真締川上流域を始め、小串構内の北西に隣接し小串古墳群が立地する小串丘陵に由来が求められるが、明言しうる状況はない。今後、山口大学医学部構内遺跡の調査の継続とともに、周辺地での埋蔵文化財調査が拡充すれば、自ずと明らかなものになるであろう。

なお、調査原因となった建物改修工事計画については、土地掘削が最深部でも1mとなっていることから、埋蔵文化財資料館専門委員会にて本発掘調査は不要と判断された。

小串構内は現状で空閑地が少なく、新規建物等が計画可能な場所はほぼ構内北部に限られている。構内北部は遺跡地内でも良好に埋蔵文化財が遺存する地点となっているため、今後とも慎重な対応が必要と言える。

〔註〕

- 1) 横山成己(2006)「第1章第3節1. 医学部基幹整備(オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口
- 2) 横山成己(2006)「第1章第3節2. 医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口
- 3) 小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻,宇部(山口)

第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査

1. 工学部総合研究棟（本館）改修工事（Ⅲ期）に伴う確認調査

調査地区 常盤構内

調査面積 約147m²

調査期間 平成19年9月19日

調査担当 田畠直彦

調査結果 工学部総合研究棟（本館）改修工事（Ⅲ期）に伴い、Ⅰ・Ⅱ期工事と同様に建物改修工事と配管工事が計画された。掘削工事の平面形は建物沿いの幅約3.5m、長さ約36mの範囲に加えて、西北部に約4m×5.2mの張り出し部を持つ。工事では現地表下約150cmまで掘削が行われたが、ほとんどが造成土の範囲内であった。ただし、張り出し部のA点では、現地表下30cmで地山である明黄褐色〔10YR6/6〕シルト、60cmで岩盤〔黃灰色（2.5Y4/1）、明黄褐色（2.5Y7/6）、淡黄色（2.5Y8/4）が縞状に混じる〕を確認した。岩盤は北から南へ傾斜しており、A地点南端部では掘削底面で岩盤を検出した。

以上により、今回の調査区内においても平成15年度の調査・平成18年度の調査と同様に構内造成時の削平が著しいことが判明した。

【註】

- 1) 田畠直彦（2005）「第1章第5節 工学部本館改修工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』山口
- 2) 田畠直彦（2010）「第1章第4節 工学部総合研究棟改修工事（Ⅱ期）に伴う確認調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』山口



図 27 調査区位置図



写真 43 調査区全景（北西から）



写真 44 A 地点土層断面（北西から）

付箇1 平成19年度 山口大学構内遺跡調査要項

山口大学大学情報機構規則

改正 平成18年3月14日規則第27号

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学情報機構(以下「機構」という。)に関し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の施設をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)埋蔵文化財資料館

2 前項の施設に関し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に関すること。

(2)大学情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に関すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に関すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に関すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に関する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会(以下「情報セキュリティ委員会」という。)を置く。

2 情報セキュリティ委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(情報基盤整備委員会)

第6条 機構に、情報基盤の整備に関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会(以下「情報基盤整備委員会」という。)を置く。

2 情報基盤整備委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(機構長)

第7条 機構に機構長を置き、学術情報担当副学長をもって充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副機構長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教授のうちから機構長が指名した者をもって充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である副学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に欠員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の残任期間とする

(専任大学教育職員)

第9条 機構に、専任大学教育職員を置く。

2 専任大学教育職員の選考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任大学教育職員の選考に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に関する事務は、情報環境部情報企画課において処理する。

(運営)

第11条 この規則に定めるもののほか、機構に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館規則

平成16年4月1日規則第148号

改正 平成17年3月24日規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報規則(平成16年規則第139号)第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法(昭和25年法律第214号)に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1) 本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収藏・展示及び調査研究
- (2) 本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行
- (3) その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

- (1) 館長
 - (2) 副館長
 - (3) 資料館所属の専任大学教育職員
 - (4) その他必要な職員
- 2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、大学情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任教授のうちから山口大学大学情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に關し、館長を助けるものとする。

(事務)

第7条 資料館に関する事務は、情報環境部情報企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるものほか、資料館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 第5条第1項の規定にかかるわらず、当分の間、館長は、大学情報機構副機構長のうちから大学情報機構長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

(組織)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会(平成16年規則第140号)第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に関し、次の事項について審議する。

- (1) 管理及び運営に関する事項
- (2) 整備充実に関する事項
- (3) 予算に関する事項
- (4) その他資料館に関し必要な事項

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 機構長
- (2) 副機構長
- (3) 館長
- (4) 副館長
- (5) 資料館所属の専任大学教育職員
- (6) 考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員
- (7) メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち館長が指名した者1名
- (8) 施設環境部長
- (9) 情報環境部長

平成19年度山口大学構内遺跡調査要項

(10) 情報環境部情報企画課長	委員会に出席させることができる。
(11) 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長	(部会等)
(任期)	第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。
第5条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が 生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。	2 部会等に關し必要な事項は、専門委員会が別に定める。
(委員長)	(事務)
第5条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。	第8条 専門委員会の事務は、情報環境部情報企画課において処理する。
2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。	(雑則)
3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。	第9条 この内規に定めるものほか、専門委員会の運営に關し必要な事項は、専門委員会が定める
(委員以外の者の出席)	附 則
第6条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門	この規則は、平成18年4月1日から施行する。

平成19年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員	福政 修 (大学情報機構長・工学部教授)	
	三池 秀敏 (大学情報機構福機構長・工学部教授)	
委員長	糸長 雅弘 (埋蔵文化財資料館長・大学情報機構副機構長・教育学部教授)	
委員	中村 友博 (副館長 人文学部教授)	村田 裕一 (人文学部講師)
	王 輝 (メディア基盤センター助教授)	郡田 等 (施設環境部長)
	大場 高志 (情報環境部長)	板谷 茂 (情報環境部情報企画課長)
	田畠 直彦 (埋蔵文化財資料館助教)	横山 成己 (埋蔵文化財資料館助教)

付節2 山口大学構内の主な調査

表3 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区	L~N-15	1	30?	土壇、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠熙	年報X I
	第II地区家畜病院新営	R-20・21 S-T-19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	
	第II地区		3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第IV地区牛舎新営	S-T-10-11	4	300	弥生溝・土壤、古墳窓穴住居、中世住跡跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第IV地区		5				試掘	〃	
昭和42年	第III地区杭列区 および陸上競技場	D-19・20 E-17・19~21 F-17・18	6	1,600	杭列、弥生窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木梳	事前	〃	
	第III地区南区	G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第III地区北区	H-20 I-19~21 J-20・21	8	1,400	窓穴住居、溝、土壤、柱穴		〃	〃	
	第III地区東南区	G-23 H-23・24 I-J-24 K-23・24 L-23	9		弥生窓穴住居	弥生土器	〃	〃	①
	第III地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
昭和44年	第V地区学生食堂	J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第V地区		12		河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田 遺跡調査班	
	第I地区C1区大学本部新営	K-L-14	13	600	窓穴住居、溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
	第V地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
	第I地区D1区第1地点	L-13	14		近世大溝	弥生土器、木痕痕	〃	〃	
昭和46年	第I地区D1区第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第I地区D1区第3地点	M-13・14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃	
	第I地区D1区第4地点	M-N-14	17		土壤、検穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第I地区D1区第5地点	L-12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃	
	第I地区D1区第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
昭和50年	第I地区D1区第7地点	M-N-13	20			須恵器	〃	〃	
	第I地区E1区第2学生食堂新営	M-N-14・15 O-15	21	900	古墳窓穴住居、土壤溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	年報X II
	第II地区					弥生土器	試掘	〃	
	第III地区				窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃	②
	人文学部校舎新営	M-N-21	22	160			〃	調査担当 近藤義一	年報X
昭和54年	教育学部附属養護学校新営	A-20・21 B-19・20 C-19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学理系 文化財資料館	年報IX
	理学部校舎新営	N-O-19・20	24	250			〃	山口市 教育委員会	年報X
	農学部動物舎新営	P-19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L-14	26	740	溝、土壤、柱穴、中世井戸、土壤基、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報X
	経済学部校舎新営	K-21	27	66			試掘		
昭和55年	農学部農業機械実験施設新営	P-Q-15	28	50	溝、土壤		事前		年報X
	本部環境整備	E-14~16 F-15・16	29				立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10~11 P-9~10	30				"		年報X
	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生整穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		"		
	教育学部美術棟新営	J-K-19~20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	"		
	正門構内新営	I-11	34						
	時計塔埋設	I-14	35				"		
	本部構内擁壁取設	K-1~13~14	36				"		
	教育学部構内擁壁取設	F-15~17 J-17	37				"	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J~M-15 M~N-16	38				"		
	農学部中庭整備	N-O-17	39				"		
昭和56年	教育学部施設改修	O-16	40				"	工法等変更	年報I
	学生部文化会庫新営	M-R-9	41				"	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-S-9	42				"		
	附属図書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳、土壤、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		
	大学会館新営	M-N-14~15	44	130	弥生整穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属施設	A-B-21	45	880			立会		
	放送性同位元素結合実験室	O-18	46	2			"		
	緑水園同位元素分析室	O-18	47	10			"		
	農芸部自動車置場	L-17	48				"		
	附属図書館新営	J-K-16	49	150			"		
昭和57年	大学会館新営	M-N-12~13	49	2,000	古墳井戸、土壤、柱穴、中世井戸、廻柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輪入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、綠釉陶器、木簡、石器	事前		
	ラグビー場防球ネット新営	G-H-18~19 H-19~20	50	114	弥生溝、弥生～古墳整穴住居、土壤	弥生土器、土師器、石製品	"	整穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M-N-20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場	I-J-12~13 H-23	52	183			"		
	および正門花壇新営								
	学生部アーチェリー場の台・籠柱設置	N-S-9	53	33			"		
	学生部総合整備	M-7~8	54	1.6			"		
	学生部野球場散水栓取設	F-21 K-22	55	1			立会		
	教養部環境整備	I-15~16 J-15 K-17~18 L-18	56	81			"		
昭和58年	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15~16 F-16	57	12			"		
	大学会館ケーブル布設	N-12	58	160	弥生土壤、柱穴	弥生土器	事前		
	大学会館排水管布設	J-L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土壤、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	"		
	学生部テニスコートフences改修	B-17 C-16~17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19~21	61	8			立会		
	大学会館環境整備	L-14~15 M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生整穴住居、廻柱穴、土壤、古代～近世土壤、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶器、国産陶器、土製品、石斧、原石、鉄器、空塼	試掘		
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5			立会		
	農芸部附属農場制料園	R-17~19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輪入陶器、縄口、石器、鉄斧	"		
	積水灌修整備	V-15~17	65	325			"		
昭和59年	農芸部附属農場農道改修	I-J-19	66	430			"		
	教育学部前庭環境整備	O-P-16	67	2.5		須恵器	"		
	中央ボイラー棟車止設置								

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石器、瓦片、鐵洋	#		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部部活動実習棟周辺環境整備 (実験動物活動場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部環境整備(砂利設置)	N-21	71	4			#		
昭和61年	農学部附属農場畜舎	S-T-19	72	270			#		年報VI
	国際交流会館新館	M-22-23 N-22	73	70	弥生・古墳・河川跡 中世～近世墓	弥生土器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鐵廢玉、加工板のある剝片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世墓、柱穴	土師器、瓦質土器	# 工法変更		
	農学部附属農場農道交通規制 (施設ボール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門横(木田内)境界杭設置	J-19	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			#		
昭和63年	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市瀬神社1号塚お上げ 間田神社跡の送水管設	B-17～18 C-18～19 D-19～20 E-20～21 F-21～22 G-22～23 H-23～24 I-J-K-24 L-23～24 M-N-23 O-22～23 P-Q-22 R-21～22 S-21 T-20～21 U-19～20 V-18～19 W-X-18	80	2,100	古墳・弥生溝、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器 (墨書きのもの含む) 瓦質土器、製塙土器、 石斧、板石	立会 山口市教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館		
	新業部自動洗車機設 (屋根設置および搬入移動)	K-L-18	81	3.5			#		
	教育部身体障害者用 スロープ設置	L-15～16	81	3			#		
	経済学部散水設置	L-20	83	4			#		
	吉田構内水泳プール 改修等	E-15 F-15～16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 木道管理設	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 整備	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本部身体障害者用スロープ 設置	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ設置	K-18～20 L-18	88	78			# 工法等変更		
昭和62年	附属図書館荷物運搬用 スロープ設置	L-16	89	8		弥生土器	#		年報VII
	教養部G7番教室改修	K-16	90	1			#		
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新設	J-K-18～19	91	240		ブランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新設	J-K-17	92	35	埋甕上壇、溝、柱穴	土師器、須恵器、 瓦質土器、石斧	試掘		
昭和63年	教養部複合棟新設	I-J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		年報VIII

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新宮	J-K-17・18	94	900	溝・穴、河川跡、 堅穴柱居、土壙、溝、 井戸、埋立柱根跡、 谷状遺構、柱穴	織文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石器、石斧、 木製品	事前		
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	年報Ⅱ
	国際交流会館新宮	M-N-22・23	96	195			〃		
	教育学部附属幼稚園	B-20	97	1			〃		
昭和63年	農学部附属農場D7号圃場 排水管理設及び E6網場進入路拡幅	L-N-12	98	55	中世土壤塗か。	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、鐵石	〃		
	農学部植物栽培	N-17	99	3			〃		
	経済学部集木樹取設	J-20	100	0.5			〃		
	教養部複合棟新宮に伴う 自転車置場移設	I-16	101	1	包含層か		立会		
昭和64年	国際交流会館新宮に伴う 排水管理設	N-O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	〃		年報Ⅲ
	教養部複合棟新宮に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			〃		
	サッカーラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K-N-22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新宮	J-L-15	106	4	古墳構造構柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、 六連式質塙土器	事前		
	桜野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新宮	H-22 I-21・22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		〃		
平成元年	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			〃		
	体育施設給水管改修	G-H-16	111	50		陶器	〃	工法等変更	年報Ⅳ
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟 地下貯泥槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剝片、 二次加工のある洞片	〃		
平成2年	第2武道場排水渠新宮	G-15	114	2	渠		〃		
	室内標識設置	I-14 L-18	115	0.5			〃		
	本部東庫給水管改修	I-13	116	6.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭環境整備	N-14・15	117	35	中世溝		〃		
平成2年	大学会館前庭環境整備 第1学生食宿設備改修	M-15	118	2			〃		年報Ⅴ
	教育学部附属医科学校新宮	I-J-19	119	7			〃		
	農学部連合宿舎新宮	E-20	120	1			〃		
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	O-P-17	121	76	調査河川	織文土器、石器	試掘		
平成3年	農学部微生物実験室 その他の機械設備改修	P-17	122	6		須恵器	立会		年報Ⅵ
	大学会館前庭記念植樹	L-M-15	124	2			〃		
	サークル棟新宮	F-14	125	1			〃		
	農学部連合宿舎新宮	O-P-17	126	980	調査河川	織文土器、石器	事前		
平成4年	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127					立会		年報Ⅶ
	吉田構内道路 (南門ロータリー)改設	H-23	128	40			〃		
	交通規制標識及びカーバー設置	O-16	129	4			〃		
	農学部附属農場ガラス室新宮	S-14	130	3.5			〃		
平成5年	大学会館前庭記念植樹	L-M-15	131	3			〃		
	泉町平川線緊急地盤道路整備工事 及内山口大学吉田団地 環境整備(正門周辺)	E-11・12	132				〃		
	泉町平川線緊急地盤道路整備 (信号機設置)	F-11	133	7			〃		
	本部給水管理設	K-M-13	134	70	渠、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製模造品	事前		年報Ⅷ
	人文学部・理学部講義棟新宮	M-20	135	4			試掘		

調査年 度	調査名	構内地区割 地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献	
平成 5年	第2層内運動場新設	G・H-16	136	144 廉	弥生土器、須恵器、 砾石	"		年報 XIII	
	敷字部給水管管理設	N-8~P-18	137	9		"			
	基礎整備 (屋外排水水管改修)	L-15 M-17~18	138	16		立会			
	敷字部連合歯医学科棟新設 電気設備	O-16	139	4		"			
	大学会館前庭/カーティー設置	N-14	140	1		"			
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6		"			
	九田川河川局改良	C-16 D-15~16	142	40		"			
	敷字部連合歯医学科棟新設	V-17	143	0.2		"			
	敷字部ガラス室設置	S-14	144	10		"			
	教育学部給水管管理設	H-19	145	15		"			
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13~15 N-14~15	146	140.9		"			
	H-20	I-19~21 J-20~21	147	361		"			
	環境整備(遺跡保存地区)	G-13 H-12	148	350		"			
	グランド屋外照明施設新設	F-20 F-21 G-18~22 H-19~20 I-21	149	600	織文河川、弥生住居、 廉、土坑、弥生～ 古墳河川、近世溝	織文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砾石、磨石、鐵石	事前 工法等変更		
	第2層内運動場新設	G-I-15~16	150	726	弥生～古代溝、 貯蔵穴、土坑、 近世溝、土坑	弥生土器、土師器、 須恵器、砾石、磨石、 鐵石、片岩、須恵器、 瓦質土器、 土師質土器、陶器、 鐵器、瓦、下駄	"		
平成 6年	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20~21 H-19~20	151	300	織文河川、弥生住居、 廉、土坑、弥生～ 古墳河川、近世溝	織文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砾石、磨石、鐵石	" 工法等変更		年報 XIV
	経済学部商品資料館新設	K-I-21	152	87.5 河川	陶器、磁器	試掘			
	美術部液処理施設新設	H-12~13	153	2 河川		"			
	体育器具庫及び便所新設	G-I-17	154	60 河川		" 工法等変更			
	経済学部商品資料館 敷設電柱設置	L-22 M-22~23	155	5		立会			
	人文学部前駐車場整備	K-23	156	6		"			
	教育学部附属風養護学校 生活排水管改修	L-22~23	157	2		"			
	テニスコート改修	C-16~18 D-15~17 E-15~16	158	15		"			
	教育学部附属風養護学校 生活訓練施設新設	B-20~22 C-20	159	16		"			
	陸上競技場整備(透水管管理設)	C-18 D-18~19	160	200		"			
平成 7年	ハンドボール場改修(フレハブ設置)	K-22	161	30		"		年報 XV	
	野球場フェンス改修	H-22 I-21~22	162	3		立会			
	基礎環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4 河川か		"			
	九田川河川局改良	D-15 E-14~15	164	100		"			
	第2層内運動場電柱設置	G-14~15	165	0.5		"			
	教養部水道管改設修理	I-16	166	2		"			
	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20~21 G-18~19~22 H-19~20 I-20~21	167	150		"			
	公共下水道接続 (教育学部附属風養護学校 ブルーム水道施設設置)	A-21	168	4		"			
	サークル棟給水管管理設	F-14	169	1		"			
	ブルーム新設給水管管理設	E-15 F-15~16	170	10		"			
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C-18	171	6 河川	土師器	"			
	教育学部ロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10		"			

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成 7年	農学部附実験研究施設新宮	Q・R-17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部附実験研究施設新宮	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C-D-18 D-E-17 E-F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附農場牛舎新宮	T-10	177	22			試掘		
	廃身宿改修	N-O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N-O-15	179	48	柱穴、包含層	石器	試掘		
	第2煙内運動場外周照明施設新設	G-15-16	180				立会		
	機器分析センター新営工事用電柱仮設	O-19~21 F-22	181				"		
	農学部附家畜病院バリー新設	S-20	182				"		
	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N-10	183				"		
	農学部附実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q-R-17	184				"		
	情報処理センタースロープ新設	O-19	185				"		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E-19~20 F-18~19 G-18	186				"		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15~16 J-20 K-19 M-10~11 N-12 O-16~18~20 P-18~19 Q-17~18	187				"		
	基幹環境整備(施設改修・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-I-21~22	189	306	河川	織文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附農場排水管布設	S-10~11	190	93	包含層、ビット	土師器、須恵器	試掘		
	地上競技場鉄棒取設	G-18	191	5.5	包含層		立会		
平成 8年	農学部附農場排水溝改修	R-11	192	2.2			"		
	種野寮バリー新設	O-20~21	193	7			"		
	チッカ一場給水管取替	H-I-19~20 I-19	194	12	包含層		"		
	基幹環境整備(共通教育センター新設)	J-K-17	195	14.3	河川	織文土器、須恵器	"		年報 XVI
	丸田川河川局部改良	E-14	196	18			"		
	農学部附農場道路舗装	K-12~13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	"		
	本部裏排水管取替	K-14	198	2			"		
	農学部附農場家畜病院整備合意園地	S-T-19	199	1			"		
平成 9年	農学部附農場堆肥合新宮	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部ハイ才農境創設施設新宮	Q-15~16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塙土器、石器	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 K-L-22 L-23	203	23.5	包含層		"		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			"		
	丸田川河川局部改良	E-14	205	48			"		
	本部2号館内側バリー新設	L-13	206	0.5			"		
平成 10年	教育学部附農業護学校新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	"		
	基幹環境整備(教育学部附農業護学校排水管取替)	C-D-21	208	17	河川		"		
	基幹環境整備(焼却場裏土すきり)	O-16	209	40			"		
	第2学生食堂増築及び改修	N-O-15	210	730	柱立柱堆物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄製品	事前		
	教育学部附農業護学校給食室改修	C-21	211	9	織文河川、土坑、柱穴	織文土器、弥生土器	試掘		
平成 10年	丸田川河川局部改良	E-F-14 F-13	212				立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(刈カ…新設)	H-15 I-J-20 O-16-18	213				u		
	農学部動物用棲却舎改修	Q-18	214				u		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17-19 M-N-18	215				u		
	理学部スロープ新設	M-18	216				u		
	ステンレス吊軸モニュメント新設	M-13	217				u		
平成11年	第2学生食堂施設その他に伴う屋外電力線路施設整備	O-14~16	218		包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	u		
	九田川河川局地改良	F-G-13 G-H-12	219				u		
	第2学生食堂北西棟壁新設	N-14	220				u		
	ツッカーライト南側防球ネット新設	G-H-22	221				u		
	第1体育館・共通教育本館スロープ新設	H-15 K-16	222				u		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-12 K-L-18 L-15 M-N-17	223				u		
	総合研究棟新宮	Q-18 R-17~19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新宮	Q-R-18~19	225	830	河川、土坑	織文土器、土師器、須恵器、製塙土器、瓦質土器、石器	事前		
	販賣及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15~16 Q-14~15 R-13~14 S-19	227		包含層		u		
平成12年	九田川河川局地改良	H-11~12 I-10~11 J-9~10 K-L-9	228				u		
	山口合同ガスガバナ…室新設及びガス配管布設	O-P-22	229				u		
	基幹環境整備(刈カ…新設)	N-22 M-10 V-17	230				u		
	あずまや新設	L-18	231				u		
	共通教育センター空調設備新設	J-16	232				u		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 M-10	233				u		
	経済部校舎改修(プレハブ校舎新設)	K-21	234	40	河川	織文土器	試掘		
	九田川河川局地改良(平成12年工事追加分)	L-R-9	235		河川		立会		
	総合研究棟新宮屋外配管布設	Q-18	236				u		
	理学部改修1期工事屋外配管布設	M-18~19 M-N-20 N-19	237				u		
平成13年	九田川河川局地改良	L-R-9	238				u		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-14~15 J-15 K-L-M-15 N-16 Q-T-V-17	239		河川		u		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室配管布設	M-19	240				u		
	理学部校舎改修2期工事自転車置場新設	N-20	241				u		
	第1学生食堂イレ改修	I-J-19	242				u		
	経済部校舎改修(プレハブ校舎新宮配管布設)	L-21	243				u		
	農学部校舎改修(解剖実習棟プレハブ校舎新設)	R-S-19	244	520	孤立柱建物、柱穴、土坑、包含層、河川	土師器、須恵器(墨書き土器)、製塙土器、鍛冶陶器、瓦、輪印、鉢底、鋼鑄石	事前		
	農学部附属農場実験圃場整地	O-14	245				立会		
平成14年	農学部校舎改修	N-Q-17~18	246		河川	織文土器	u		
	理学部改修3期工事(楽器庫揭示板、自転車置場新設)	N-O-19 M-19~20	247				u		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区別	地點	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科 ブレハブ校舎新設	N-21	248				#		
	農学部校舎改修(解剖実習棟 ブレハブ校舎新設)	R・S-19	249		河川、包含層		#		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				#		
	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O・P-16 Q-15	251	12	河川		立会		
平成15年	教育学部附属農場給食調理員 専用トイレ新設	C-21	252	1.7			#		年報3
	農学部環境整備施設南側温室	P・Q-15	253	52			#		
	理学部中庭通路屋根新設	N-19	254	5.8			#		
	理学部中庭あずまや新設	N-20	255	6.8			#		
	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13～15・18 I-16・19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		#		
平成17年	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J-K-16	257	130	ビット、河川	弥生土器、土師器	予備		年報3
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I-J-K-16 H-12, E-20	258	580	ビット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本ベトロジー学会 木村土壤の断面調査	R-16	259	3.1	河川		#		
	基幹環境整備(外灯)取扱	H-17・22・23	260	7.7			#		
平成18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16, K-17 J-16-17	261	92	ビット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備		年報4
	農学部附属畜家畜病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層・谷	土師器、須恵器 製造土器	予備		
	農学部附属畜家畜病院改修Ⅰ期	S-20	263	223	孤立柱建物跡・溝、土壤	土師器、須恵器 磚瓦陶器、木製品(柱根)	本		
	農学部附属畜家畜病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
平成18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16	265	84	ビット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本		年報4
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J-K-L-16 I-J-K-L-17	266	480	ビット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱材	立会		
	資料館(東亞經濟研究所)新設	L-20・21	267	100	土壤、落ち込み、河川		予備		
	ブレハブ貯蔵庫設	I-16	268	29			立会		
平成19年	第一学生食堂改修	J-20	269	75			#		年報5
	図書館前広場環境整備	L-17・18	270	55			#		
	ブレハブ校舎新設	F-14・15, G-15	271	400			#		
	人文学部野外用電源敷設	M-20	272	6			#		
	デニスクートフォン改修	B-C-17, C-18	273	10	河川、包含層		#		
平成19年	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期	T-20	274	48	土壤、ビット	土師器・須恵器 瓦質土器	本		年報5
	駐車場整備工事	J-21	275	10			立会		
	資料館(東亞經濟研究所)新設	L-20・21	276	550			#		
	第一事務局庁舎改修	L-15	277	5			#		
	吉田寮前配水管敷設	M-11	278	11			#		
	農学部附属農場内電源敷設	Q-15, S-18	279	0.5	ビット	須恵器	#		

白石構内

調査年度	調査名	構内地区別	地點	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳墳穴住居、講状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属山口小学校敷地改修		2	1			立会		
昭和60年	教育学部附属山口中学校技術3-1-3整備		3	2			#		年報V
昭和60年	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木植樹)		4	1			#		
昭和61年	教育学部山口附属学校	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土塙か	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報VI
昭和61年	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川路か杭列	陶磁器、不明鉄製品、石器、剝片、植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校電柱設		6				立会		年報VI
昭和62年	教育学部附属幼稚園造戸新張		7	40			#		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	#		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳墳穴住居、土壤、溝、柱穴、河川路	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、黑色土器、罐器、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、石核、砾石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園パーコー支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		11	170	弥生講状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剝片、石核	#		
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12	70	講状遺構	繩文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石器、鐵石、扁平打製石斧、砾石、剝片	事前		年報X
			13	130			立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校ゴール新設給水管埋設		14	3			#		年報XIV
平成6年	教育学部附属山口中学校ゴール新設給水管埋設		15	7			#		
平成7年	教育学部附属山口中学校自動車駐車場新設		16				#		
平成10年	教育学部附属山口小学校給室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校跡跡子小新設		18				立会		
平成14年	教育学部附属山口中学校給水設備改修		19				#		
平成14年	教育学部附属幼稚園通路場整備		20		河川、柱穴	土師器	#		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園庭庭新設山口小学校スープ新設		21	27.7			立会		年報I
平成16年	白石地区市道歩道改修		22	1	河川		立会		
平成16年	教育学部附属山口小学校事務室新設		23	101	河川、土壤または漢		#		年報2
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修		24	11			#		年報3
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校給水管改修		25	10			立会		年報4
平成18年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		26	121	河川、落ち込み、ビット	繩文土器、弥生土器	予備		年報5
平成18年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		27	38	河川、包含層		立会		

小串構内

調査年度	調査名	構内地割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和56年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			"		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	"		
	医学部基幹整備 (特高受変圧設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部臨床・講義棟 病理解剖棟新営		7	38			"		年報Ⅴ
	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土質土器、瓦質土器、陶磁器	"		
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	"		
昭和61年	医学部看護施設改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		年報Ⅵ
	医学部看護施設改修		11	20			"		
	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			"		
昭和61年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			"		年報Ⅶ
	医学部附属病院 外来診療棟周辺 環境整備等(樹木埋設)		14	18			"		
	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			"		
昭和62年	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、鐵石刃核	試掘		年報Ⅷ
	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剝片、 使用痕のある剝片、 剝片、礫石、磯、原石、 土師器、土質土器、 瓦質土器、陶磁器	立会		
昭和63年	医学部附属病院運動場整備		18	220			"		年報Ⅸ
	平成元年	医学部附属病院MRI棟新営	19	45		削器、鐵石刃、 二次加工のある剝片、 剝片、石核	試掘		
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報X
平成4年	検却棟地盤調査		22				"		年報XI
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他 (検却新當)		23	9			"		年報XII
平成6年	医学部附属病院MRI-CT装置棟新営		24	6			"		年報XIII
平成7年	医学部附属病院 看護宿舎新営		25	300			"		年報XIV
平成8年	医学部附属病院 屋外排水管布設		26	40			試掘		年報XV
平成9年	医学部歴史碑・納骨堂新営		27	6			立会		年報XVI
平成10年	基幹環境整備 (看護宿舎含む)化粧槽撤去		28	15.2			試掘		年報XVII
平成11年	医学部別棟移設		29	4			立会		
平成12年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		30	10			"		
平成13年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線・医学部 敷地西側特殊道路)		31	134	包含層、近世～ 近代用水路	剝片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成14年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		32	379	包含層、近世～近代溝	剝片、縄文土器、 弥生土器、土師器、 陶器、磁器	"	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成15年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鉄製品	"	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	縄文土器、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高エネルギー 棟新営		35	13.25			"		
平成15年	総合研究棟新営		36	382	包含層	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器	"		
平成15年	基幹環境整備(透)新営		37	76			試掘		年報I

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成16年-	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		織文土器、土師器、陶器、磁器、石器	試掘		年報2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器	〃		
	医学部総合研究棟北側 連絡用渡り廊下取設		40	40.6			立会		
平成17年-	医学部附属病院基幹環境整備 (冷熱源設備他改修)		41	37			〃		年報3
	医学部南側通用門廊取設		42	30			〃		
平成18年	モニュメント設置		43	6.2			〃		年報4
平成19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報5

山口大学構内の主な調査

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			#		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎排水管取設等			65			#		年報Ⅴ
	工学部受水槽改修		3	1.5			#		
	工学部尾山宿舎排水管改修			6			#		
昭和61年	工学部身体障害者用スロープ取設 精養施設センター(常盤センター) 空調設備取設		4	29			#		年報VI
			5	30			#		
昭和63年	工学部後却炉上屋新営		6	225			#		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間照明装置 及び防球ネット設置		7	2			#		年報IX
平成2年	工学部記念植樹		8	2.5			#		
平成3年	工学部ガス管改修		9	45			#		年報X
	大学祭展示物設置		10	7			#		年報XI
	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		
平成4年	工学部・工業短期大学部の 改組再編・博士課程設置に伴う 建物等の新営		12	40			#		年報XII
	工学部および工業短期大学部 職員宿舎取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			#		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新営 センター新営		15	12			試掘		年報XIII
	工学部地域共同研究開発 センター新営		16	16			#		
平成7年	工学部国際交流会館新営		17	8		石獅	#		
平成8年	工学部国際交流会館新営		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、刮片	事前		年報XVI
平成12年	工学部福利厚生棟新営		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーション センター新営		20	60			#		
平成14年	総合研究棟新営		21	13.5			#		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報I
	工学部定速度応力顕微計		23	20			試掘		
平成16年	実験室新営		24	52.5			#		年報2
	工学部光半導体素子実験室新営		25	9			立会		
平成17年	工学部耐水幹線工事		26	65			#		年報3
	工学部職員宿舎揚水施設改修		27	38			#		
平成18年	工学部会議棟身障者スロープ取設置 総合研究棟改修工事 (Ⅱ期・本館北)		28	280			確認		年報4
平成19年	工学部総合研究棟改修(Ⅰ期・本館)		29	147			確認		年報5

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (a)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属風光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属風光小・中学校 焼却炉新設		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属風光中学校 外灯改修		3	1		土師器	"		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属風光小学校創立 記念事業(プロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	"		年報VI
昭和62年	教育学部附属風光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	手洗清掃集 土師器、土師質土器、 陶磁器		年報VII
昭和63年	教育学部附属風光小学校 遊具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	"		年報VIII
	教育学部附属風光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鍋	"	手洗清掃集	
平成2年	教育学部附属風光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土鍋、片、鉛錠	試掘 手洗清掃集 遺物含む		年報X
	教育学部附属風光小学校 運動場改修		9	23	土壤	土師器、須恵器、 須恵器複数土器	事前		
平成3年	教育学部附属風光中学校 武道館新宮		10	38	土壤、溝状造構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報XI
平成3年	教育学部附属風光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石鍋	立会		年報XI
	教育学部附属風光中学校 バックネット小改造		12	0.5		土師器	"		
平成4年	教育学部附属風光中学校 武道館新宮		13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報XII
	教育学部附属風光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属風光中学校 武道館新宮その他		15	6			"		年報XIII
平成6年	教育学部附属風光小・中学校 ゴルフ新常設排水管理設		16	19			"		年報XIV
平成8年	教育学部附属風光小・中学校 園路(外周フェンス・防錆ネット)設設		17	7		陶磁器	"		年報XVI
平成10年	教育学部附属風光小・中学校 給食室改修		18	6			"		
平成11年	教育学部附属風光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壤	土師器、須恵器、 韓式系土器、 壺形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属風光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		
	教育学部附属風光小・中学校 上木道(給水管)改修		21				"		
平成15年	教育学部附属風光小学校エレベーター 昇降階等新設		22	169	ピット、土壤、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報I
平成17年	教育学部附属風光小学校 体育器具庫新宮		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		年報II
	教育学部附属風光小・中学校溝岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		

その他構内

調査年次	調査名	構内地区割	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート部駐車合宿研修所整備	宇部市大字小野宇土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット部駐車合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町東字中道				#		
昭和60年	熊野荘給湯機器取扱	山口市熊野町3-21	7			#		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	35	杭		#		
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市姫通り2丁目3-32 山口市水の上町6-9	1 7		土師質土器 瓦	# #	6号宿舎 2号宿舎	年報VI
昭和63年	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市白石二丁目8-7	1		須恵器、土師器、 土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	#	7号宿舎採集	年報VII
平成元年	本部職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			#	1号宿舎	年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市石藏吉町1-25	1.2		陶磁器	#	7号宿舎	
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			#	3号宿舎	年報X
平成3年	湯田宿舎A棟給配水その他の改修	山口市湯田温泉6丁目	30			#		
	経済学部6号職員宿舎廻柱設置	山口市姫通り2丁目3-32	0.5			#		年報XI
	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市天花932-2	1			#		
平成4年	上小路共同下水管布設	山口市上小路小路宇久保7-4	7			#		年報XII
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	44			#		年報XIV
	平成15年	ボート部合宿所排水整備	宇部市大字小野宇土井	80		確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新設	山口市湯田温泉6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フエンス取替	山口市水の上町6-9	1			確認		年報3
	工芸部職員宿舎(尾山)排水施設改修	平島市上野半町1-33-34	15			確認		

※文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学, 1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し隨時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の

吉田遺跡調査団の開示した調査についても、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

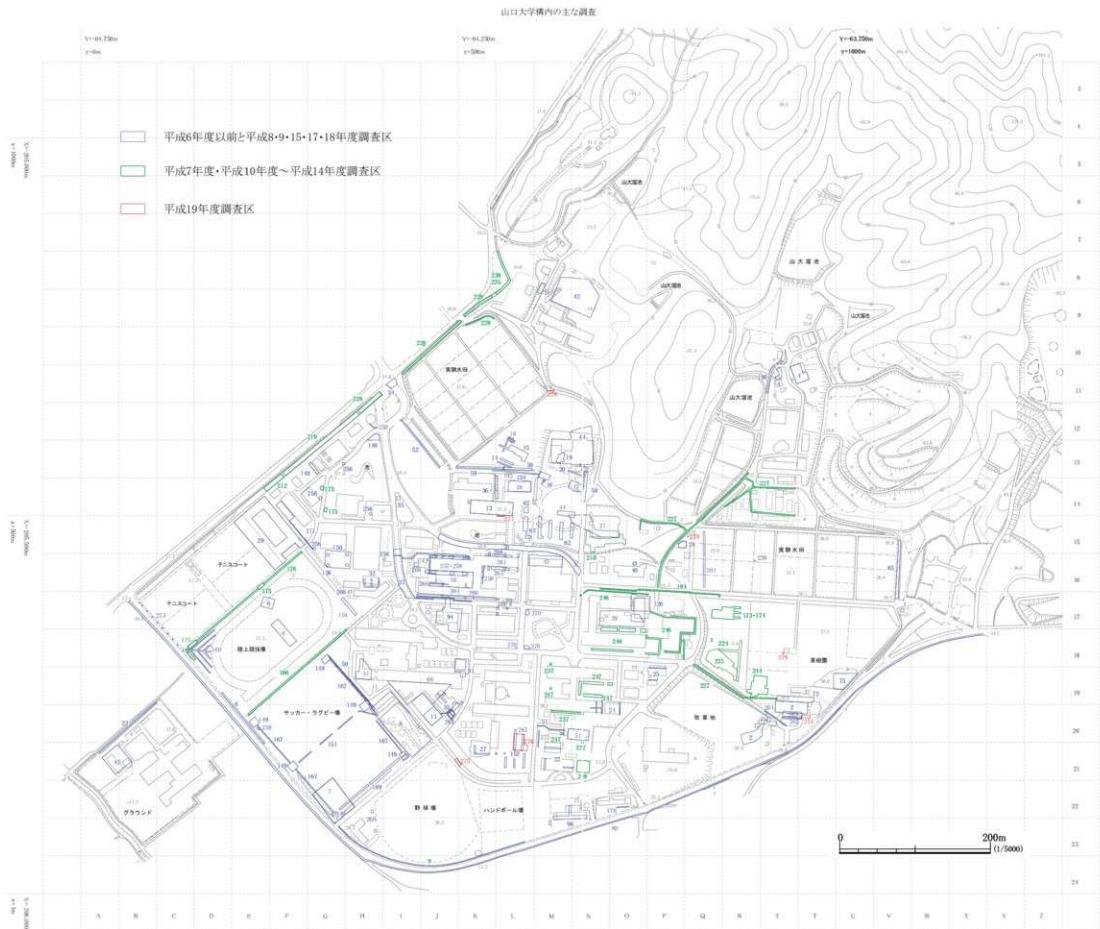


図 28 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

山口大学構内の主要調査区

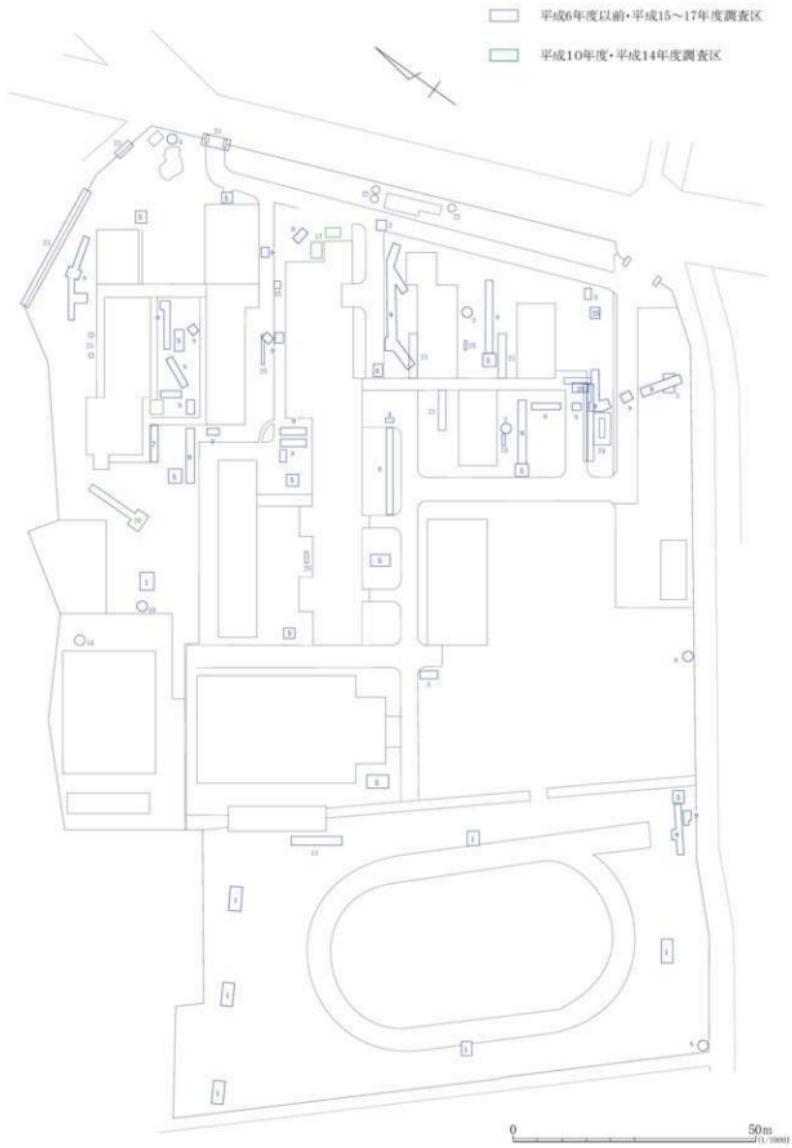


図 29 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

山口大学構内の主要調査区

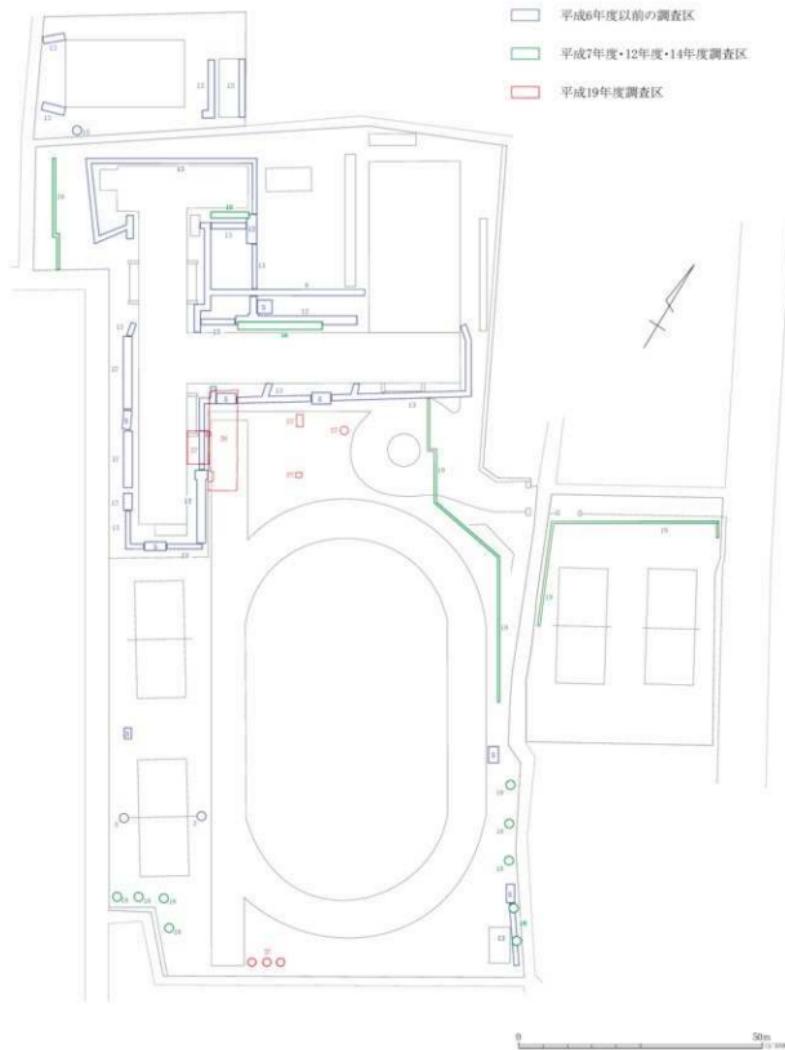


図30 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

山口大学構内の主な調査区

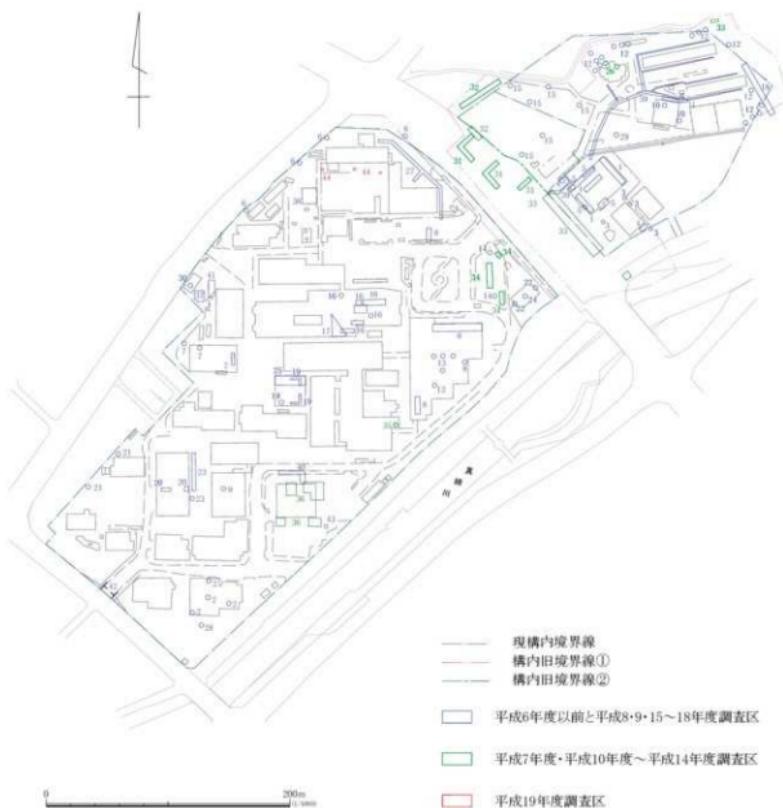


図31 山口大学小串構内調査区位置図

山口大学構内の主な調査区

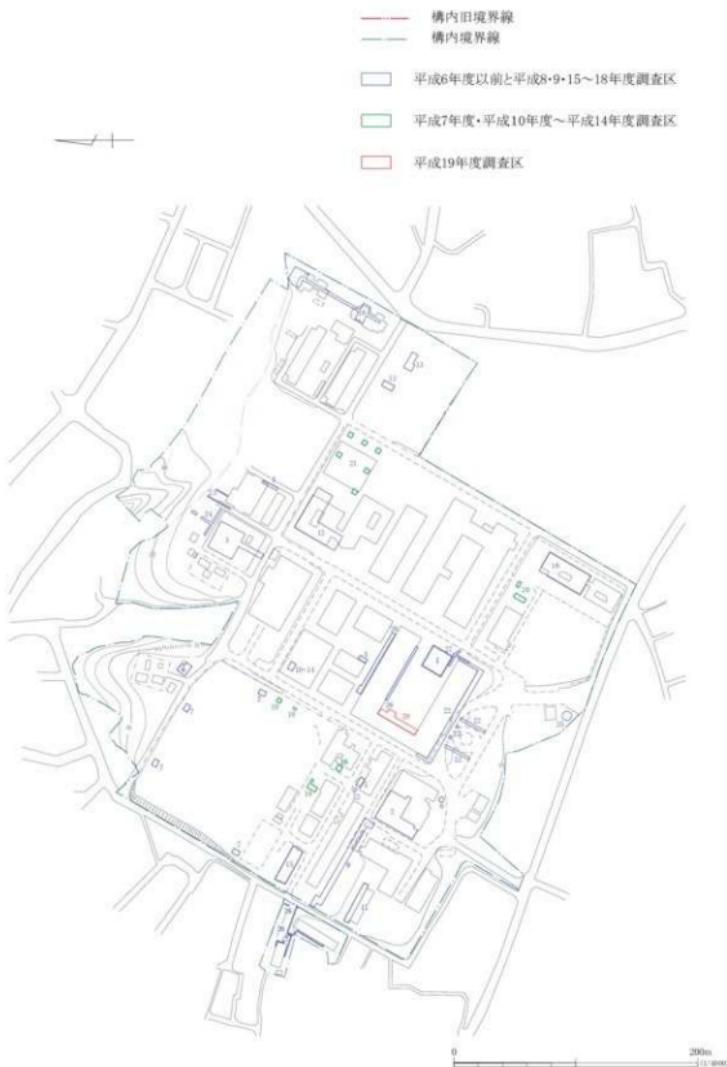


図32 山口大学常盤構内調査区位置図



図 33 山口大学光構内調査区位置図

第2章 平成19年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に1~2回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを行っている。

平成19年度は、展示・公開活動として、常設展『山口大学 学宝展』、創立30周年記念特別展『稻作到来～弥生人 つくった とった たべた～』、第24回企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催した。さらに資料館展示室以外での展示活動として、吉田構内総合図書館1階第2閲覧室にて『大学情報機構埋蔵文化財特別展』を、医学部大学祭「医学祭」では医学部図書館1階ロビーにてイベント展示『山口大学学宝展in小串』を、工学部大学祭「常盤祭」ではD講義棟1階ロビーにてイベント展示『宇部遺跡への誘い vol.1 波雁ガ浜遺跡展』を開催した。

社会教育活動としては、教育学部との共催により第6回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう2－』を開催した。また、山口市立小郡小学校6年生児童の集団展示見学を受け入れ、展示解説を行った。この他、地域NPO法人との連携で『窯窓ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』を開催した。

当年度は、本学吉田構内以外の場所で埋蔵文化財の展示を実施した他、NPO法人との連携事業等新たな資料公開・社会教育活動に取り組んだ。次項よりその詳細を報告する。

表4 埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1157	1228

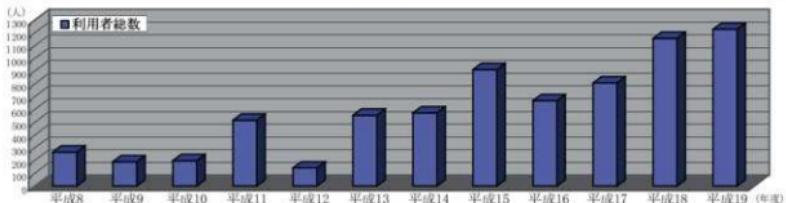
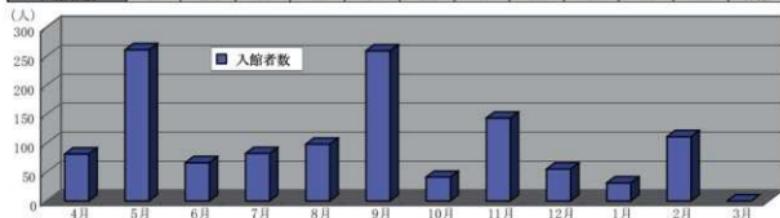


表5 平成19年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	休館
入館者数	81	261	66	82	98	259	41	143	55	31	111	休館	



第1節 資料館における展示公開活動

創立30周年記念特別展(第23回企画展)『稻作到来～弥生人 つくった とった たべた～』を開催

埋蔵文化財資料館は、平成19年度をもって創立30年を迎えた。当館は30年間に渡り一貫して本学構内に埋存する遺跡の保護を主要業務としてきたが、その一方で出土資料を用いた展示公開事業、考古学を素材とした体験学習を主とする社会教育事業も展開してきた。そこで平成19年度最初の資料公開活動として、当館に蓄積された本学構内遺跡の調査成果と社会教育活動成果とを融合させた企画展示を、創立30周年記念事業の一環として実施することとした。

山口市に所在する本学吉田構内は、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が包含される複合遺跡であるが、昭和41年から開始された本学統合移転に伴う発掘調査により、まず注目されたのが構内南西部の沖積平地部における弥生時代集落跡の発見であった。この集落跡はその後「遺跡保存公園」という名称で現在でも保存されている。その後、周辺城及び構内西部の低丘陵部にまで弥生時代の遺構・遺物が分布することが確認され、弥生時代前期から終末期にかけての集落形成の変遷が徐々に明らかとなりつつある。一方、当館が平成13年度から実施している市民講座「公開授業」では、平成16年度より「弥生土器づくり」を、平成18年度より「弥生時代の米づくり」をテーマとし、弥生時代の生活文化の実態を復元する取り組みを行ってきた。

そこで特別展では「弥生時代の食生活」を主題に、吉田遺跡出土の弥生時代資料の他、環濠内から多くの木製品が出土した宮ヶ久保遺跡(山口市阿東所在)の出土品、米、大豆、クリなどの炭化穀物が多量に出土した下村遺跡(美祢市所在)出土品(以上(財)山口県埋蔵文化財センター所蔵)、弥生時代の貝塚遺跡として著名である北迫遺跡(宇部市所在)出土品(宇部市教育委員会所蔵)、そして参考資料として木製農耕具を始め多種に渡る動植物遺存体が出土している東奈良遺跡(大阪府茨木市所在)の出土品をそれぞれ借用し、展示を行った。また、展示室の一角に「公開授業コーナー」を設け、様々な実験成果を解説し、授業風景の映像などを公開した。

4月2日から6月1日までという短期間の展示であったが、約350名の入館者を迎えることができた。入館者からは、木製農具や穀物類などの有機物が遺存していることへの驚きとともに、「思ったより豊かな食事をしていたことが分かった」「狩猟の方法も教えて欲しい」「古代米づくりに参加したい」などの感想や要望が寄せられ、当館の多様な活動に対する評価とともに様々な需要を感じることができた。



写真45 第23回企画展ポスター



写真46 企画展の模様

平成19年度常設展『山口大学 学宝展』を開催

平成19年度の常設展では、山口市に所在する本学2地区(吉田遺跡・白石遺跡)から出土し、当館に所蔵されている埋蔵文化財資料の中で、地域史を叙述する上で欠かせない資料72点を「山口大学所蔵貴重学術資料=学宝」と位置づけ、公開を行った。展示品の内訳は、吉田遺跡出土品に関しては旧石器時代資料2点、縄文時代資料4点(土器3・石器1)、弥生時代資料9点(土器4・石器3・土製品1・ガラス製品1)、古墳時代資料27点(土器13・石器8・土製品6)、奈良時~平安時代資料19(土器15・木製品2・石製品1・銅製品1)、室町時代資料3点(瓦質土器3)、白石遺跡出土品に関しては古墳時代資料7点(土器3・木製品4)である。

6月25日から10月12までの開催期間に、約550名の入館者を迎えた。アンケート調査の回答を見ると、1番印象に残った展示物は「石製丸瓶」の回答が最も多く、次いで「ガラス小玉」であった。土器類に関しては、各時代における特徴的な器形の資料を展示了もの、観覧者の目には「似たような土器」と映ったようである。各資料の個別解説の不足が招いた結果であり、真摯に反省したい。

また、同時にアンケートにて「山口大学にあるもの(学術資料・図書・建物・自然、何でも結構です)であなたが「これはスゴイ!」と思う物は何ですか?」という調査を行ったところ、最も多かった回答は「キャンパス内にいる猫・池の鯉」などの動物であり、次いで「自然」、次いで「構内の広さ・広大な農地・教室」などの設備関係という結果となった。「学術資料」「出土品」「図書館蔵書」という回答もあったがいずれも1票に止まっている。設問に無回答のアンケートも多く、概にこの結果が本学の平均的な印象を示すとも限らないが、学生や市民を中心とする入館者が本学に対し「環境面では恵まれているが、研究素材(人材を含む)には満足できない」と感じている可能性は高いと言って良いのではないかろうか。

当館は学内での開発に伴う文化財保護業務を行い、得られた成果を書籍やインターネット、そして実物展示を通して広く学内外に公開することを主要業務としている。近年は入館者も増加傾向を示しているが、これは学外者(市民)の来館によるところが大きく、学生および教職員の入館数はほぼ横這い状態にある。換言すると、地域連携・社会貢献面では一定の成果を得ているが、本学の教育・研究への貢献度には変化がないということにもなる。当館が今後も埋蔵文化財を主とする学術資料を公開し続けることに変わりはないが、山口大学では資料展示機能を有する数少ない施設として、他分野の本学所蔵学術資料や研究成果を公開する取り組みも視野に入れつつ今後の展示活動方向性を再考したい。

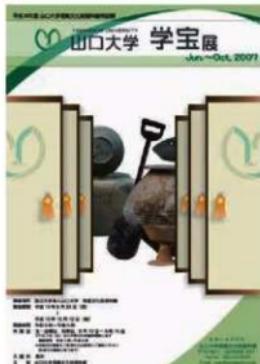


写真 47 平成 19 年度常設展ポスター



写真 48 常設展の模様

第24回企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催

平成19年11月3日から平成20年2月29日までの期間、当館展示室において企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催した。

埋蔵文化財を含め歴史資料を取り扱う展示では、「この資料の存在によりここまで歴史が解明された」というテーマで開催されるのが常であるが、当企画展では逆に「資料は存在するものの未だ解けない古代山口県の謎」をテーマとした。素材としては、①王屋敷(向津具)遺跡出土有柄銅劍、②沖ノ山出土の無文土器系壺と半両銭、五銖銭、③土井ヶ浜遺跡出土の弥生人骨、④明地遺跡出土の分銅形土製品、⑤神田山石棺蓋石の盃状穴、⑥萩見島のジーコンボ古墳群出土品、⑦石城山神籠石出土品と土墨という、考古学史上でも著名である山口県の7遺跡(遺物)を取りあげた。

宇部市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、光市教育委員会、(財)山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、山口大学人文学部考古学研究室の協力により、展示では実物資料および複製品を多数公開することができた。それと同時に、各遺跡・資料の概要とともに現状の考古学研究において各遺跡の評価が定まらない原因をパネル解説した。

企画展開催中、入館者は340名を数えた。アンケート調査によると、一番印象に残った展示物については「土井ヶ浜遺跡の弥生人骨出土模型」との回答が最も多く、以下は「分銅形土製品」「盃状穴」「ジーコンボ古墳群」の順であった。また、「『山口県の文化財』と聞いてあなたが思い浮かべるものは何ですか」という設問に対しては、「瑠璃光寺五重塔」が回答の20%を占めており、複数票を集めた他の回答には「錦帯橋」「土井ヶ浜遺跡」などがあった。全体的な傾向としては室町時代(大内氏関係)と江戸時代末から明治時代初頭(毛利氏関係)の文化財に回答が集中しており、改めて当県の歴史・文化に対する市民の興味傾向と認識度を確認することができた。

当館の企画展に関しては、「縄文時代に的を絞って弥生が開花する前の状態を知りたい」「山口盆地の遺跡に関して」「県内の山城に関して」「土器の見方」など、埋蔵文化財を素材とした展示を希望する声の他に、「100万年前から今までの地形の変化を学べる展示」「山口の歴史を食べ物の移り変わりから見た展示」「イギリス文化史」「恐竜や植物の化石」などを希望する声も多数寄せられた。これらの要望は、当館に埋蔵文化財資料の公開活動に止まらず「大学博物館」としての役割を求めるものであろう。今後ともアンケート調査を続けながら、学内の他分野研究との連携の可能性を模索したい。



写真 49 第24回企画展ポスター



写真 50 企画展の模様

大学情報機構2007 in 医学 Fes.にて企画展を開催

平成17年度より、当館とメディア基盤センター、図書館で組織される大学情報機構は、姫山祭(山口市吉田キャンパス大学祭)にイベント参加を行ってきた。本年度より活動範囲を医学祭(宇部市小串キャンパス大学祭)と常盤祭(宇部市常盤キャンパス大学祭)まで拡大し、「大学情報機構2007」と題する各組織の特徴を生かしたイベントを開催することとなった。

平成19年度医学祭会期中の11月10日に、医学部図書館1階ロビーにて「大学情報機構2007 in 医学 Fes」を開催した。医学部図書館は『オープンライブラリー2007 写真と資料で見る山口大学の移り変わり』と題し、新制大学として誕生した昭和30年代の本学の学生生活の様子を公開した。メディア基盤センター小串センターは、『お祭広場 L I V E カメラ』と題し、医学祭のメイン会場である「お祭り広場」の様子を学内ネットでストリーミング配信を行った。当館は3組織の中で唯一医学部キャンパス内に施設を持たないが、吉田キャンパス総合図書館の協力により、展示ケース1台とパーティションボード1枚を搬入し、医学部キャンパスでは初の埋蔵文化財資料展を開催することとした。

当年度には、当館展示室での常設展を『山口大学学宝展』と表して当館が所蔵する構内遺跡出土品の中でも特色ある資料を選定して公開したが、これは対象範囲を吉田構内(山口市)が所在する吉田遺跡と、白石構内(山口市)が所在する白石遺跡に限定したものであった。そこで今回の資料展示では『山口大学学宝展 in 小串』と題して、同じく周知の埋蔵文化財宝蔵地内に所在する小串構内(宇部市)での発掘調査により出土した資料の公開を行った。

小串構内が所在する山口大学医学部構内遺跡は、小串丘陵南端裾部に広がる低地に位置しており、現地表高は約3mである。現在でこそ南方の瀬戸内海岸線から約1.5kmの距離を有しているが、中世までは真締川河口部の汽水域となっていたようで、地下には海成砂層や真締川上流より運ばれた土砂が分厚く堆積している。各層内には包含密度の差こそあるものの旧石器時代から江戸時代までの遺物が含まれている。今回の展示では、小串旧石器資料、縄文時代から古墳時代の土器資料、中世土器および古錢、江戸時代の煙管や将棋駒など計21点を新たに『山口大学所蔵貴重学術資料=学宝』と位置づけ、公開を行った。

当日は医学部図書館が通常開館であったため、利用者の迷惑とならないよう最小限の展示解説を行うに止めた。見学者は約50名と少数であったが、出土地での資料公開の重要性を再認識させられた。



写真 51 展示ポスター

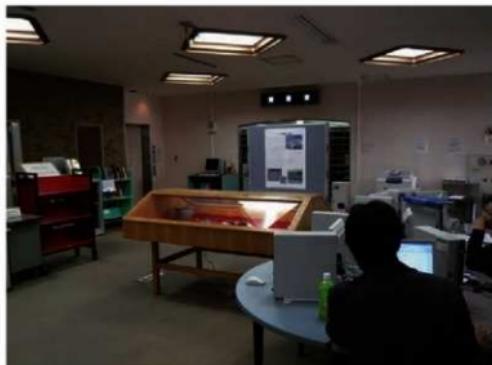


写真 52 展示の模様

大学情報機構2007 in 常盤Fes.にて企画展を開催

平成19年11月24日、本学工学部が所在する宇部市常盤キャンパス大学祭「常盤祭」にて、大学情報機構主催イベント「大学情報機構2007 in 常盤Fes.」を開催した。

当日はD講義棟1階ロビーを会場とし、工学部図書館はパネル展示『写真で見る山口大学工学部の今昔』を、メディア基盤センター常盤センターはインターネットを通じた常盤祭のストーリーミング配信『常盤祭LIVEカメラ』を、そして当館は資料展示『宇部遺跡への誘いvol.1 波雁ガ浜遺跡展』を開催した。

山口県の瀬戸内沿岸部では古墳時代から古代にかけての土器製塩遺跡が複数ヶ所で発見されているが、拠点的製塩遺跡と目されるのは美濃ヶ浜遺跡(山口市秋穂所在)と波雁ガ浜遺跡(宇部市東岐波所在)の2遺跡である。美濃ヶ浜遺跡に関しては、昭和35年に実施された学術調査に山口大学古代遺跡調査室が参加し、翌36年に実施された波雁ガ浜遺跡の緊急発掘調査では当時本学教育学部の教官であった小野忠熙氏が調査を担当した関係か、当館には両遺跡から出土した資料が多数収蔵されている。今回の展示では宇部市に所在する拠点的製塩遺跡の波雁ガ浜遺跡出土品(製塩土器約200点)を公開するとともに、製塩風景模型と解説パネルによって日本列島における土器製塩の歴史と製塩方法、製塩土器の型式変遷について説明した。また、宇部市に所在する古墳時代の著名遺跡で現在でも現地見学が可能であるある松崎古墳、棚井古墳群、若宮古墳、花ガ池窯跡のパネル展示を行い、今回の展示で郷土の先史時代に興味を抱いた学生および市民が直に遺跡に触れることができるよう、遺跡マップを配布した。

常盤祭メイン会場に隣接していることもあり、展示会場は多くの人々で賑わったが、その大多数はメイン会場への抜け道としての通過者であり、残念ながら展示に足を止める人は少なかった。医学祭での取り組みを含め、当館としては初めて本学吉田キャンパス以外での資料展示を試みたが、いずれも成功とは言い難い結果である。問題点を挙げるとするならば、やはり大学祭という華やいだ雰囲気に考古資料がそぐわないことであろう。特に学生にとっては大学祭はやはり「祭り」であるようで、実物資料のみならず解説パネルまで観覧いただいたのは学外者(市民)と教職員に限られた。将来的にこの大学情報機構の取り組みが継続するかは不明確であるが、大学祭で埋蔵文化財を素材とするイベントを実施する際には、体験型イベントや動画コンテンツなどを併用した実物資料展示が望ましいのかも知れない。そういう意味では、本年度の取り組みは当館の今後の活動を考える上で非常に重要なものとなった。



写真 53 展示ポスター



写真 54 展示の模様

第5回～第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当年度より会場を総合図書館入退館ゲートから1階第2閲覧室へと変更している。

第5回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしものとの遺跡シリーズ3 白石遺跡』

平成19年4月2日から6月15日の期間で開催した。白石遺跡は山口盆地の中央部に位置する集落遺跡であり、鴻ノ峰から南方に派生する丘陵裾部に立地している。現在遺跡内には教育学部附属幼稚園・山口小学校・山口中学校が所在しているが、そもそもこの地が周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されたのは昭和58年に実施された山口小学校グラウンド内での試掘調査が契機となっている。その調査では、古墳時代中期の竪穴住居と弥生時代終末から古墳時代初頭に機能していたと推定される溝状遺構、遺物包含層などが確認されている。今回は昭和58年の調査で竪穴住居跡から出土した土器資料、溝状遺構から出土した木製品を中心に資料展示を行った。

第6回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ3 須佐唐津古窯跡』

平成19年6月18日から10月26日の期間で開催した。須佐唐津古窯跡は、萩市唐津（合併前住所：阿武郡須佐町唐津）に所在する県の指定史跡であり、列島最古級の青磁窯として著名である。

窯跡から産出された「須佐焼」に関しては、古くよりその存在は知られていたものの、現地の古文書や陶工の過去帳の類が江戸時代の火災により焼失したこと、昭和に至り陶工が萩に転出したことなどが原因で、長らく実態不明の陶磁器として様々な憶測を呼んでいた。「古須佐は青磁なり」という口伝が存在する一方で地元に伝わる陶磁器に大陸産古青磁と見紛うような優品も散見されるため、昭和30年代にはこれらが須佐焼か大陸からの伝来品かで論争が繰り広げられるにまで至った。この論争を決着すべく、昭和38年以降地元の有志が分布調査や試掘調査を行ったところ、大量の陶磁器片が散布する地点が特定された。昭和41年には須佐町教育委員会を調査主体とする学術発掘調査が実施され、3基の窯跡と2ヶ所の物原が確認されたのであるが、本学教育学部教授（当時）小野忠熙氏が調査担当者として参加していたことから、当館には青磁・陶器類、窯道具の実物資料を公開している。

今回の展示では、須佐唐津窯跡発見の経緯を解説するとともに「まぼろしの須佐青磁」とも呼ばれる青磁と、捕鉢等の陶器類、窯道具の実物資料を公開した。

第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしものとの遺跡シリーズ4 弥生時代の吉田遺跡』

平成19年10月29日から平成20年3月28日の期間で開催した。吉田遺跡は旧石器時代以降江戸時代までの資料が包蔵される複合遺跡であるが、現在のところ確実な集落跡の確認は弥生時代以降となっている。弥生時代集落は吉田キャンパス西部の沖積平地から北東部の低丘陵地を中心に展開している。展示では、竪穴住居や土壙から出土した土器資料の他、石庖丁や石鎌、ガラス小玉を公開した。



写真 55 第6回大学情報機構埋蔵文化財特別展の模様



写真 56 第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展の模様

第2節 資料館における社会貢献活動

第7回公開授業「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－2」を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第7回目となる平成19年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。実施体制も昨年度と同様、埋蔵文化財資料館と山口大学教育学部との共催で、山口市大内御堀菅内にある山口大学教育学部実習農場で延べ4回に渡って行い、小学生2人、保護者・教育学部学生、山口県立大学生など20名、総勢22名の皆様に参加していただいた。以下で授業内容を報告する。

5月26日（土）一田植えー

田植えに先立ち、4月19日（木）に事前に申し込みのあった参加者4名と教育学部の学生とで育苗箱に種類をまいた。種類は無事に発芽し、5月26日に好天の中、教育学部の徳永技術専門職員に代かきをしていただいた約53m²の水田に田植えを行った。

7月21日（土）一草取り・土器づくりー

稲の生長は予想以上に早く、6月12日には長さ約33cm、7月21日には約80cmに生長していた。しかし、日照時間と水田の栄養分の不足により、葉がやや黄色くなっていたため、少量の肥料を施肥した。また、昨年同様、水田にはほとんど雑草が生えなかつたが、畦には雑草が生い茂っており、参加者全員で協力して除草を行った。

その後、実習室にて館員から弥生土器の説明を受けた後、土器づくりを行った。ほとんどの受講者にとって土器づくりは初めての体験であったが、弥生時代をイメージした力作が多数できあがった。なお、製作した土器は8月25・26日に館員と徳永技術専門職員・参加者有志により、「覆い焼き」にて焼成し、概ね無事に焼成することができた。

10月7日（土）一収穫ー

今年は大きな台風もなく、秋晴れの晴天の中、作業を行った。最終的に稲は長さ約90～110cm（昨年：120cm）にまで成長した。収穫にはアワビの貝殻や模造した木庖丁、石庖丁などを使用して穂摘みを行い、残りは鎌で根刈りをしてはせ架けをした。稲を任意で抽出し、参加者全員で収穫量を調べたところ、1株が分かれた数（茎数）は9～13本、1本についた穂は42～134粒、1株についた穂は約600～1200粒（昨年：1000～1800粒）であった。稲は昨年より一回り小さい印象で、収穫量も昨年よりも少ないことが判明した。

10月6日（土）一脱穀・糲すり・赤米を食べるー

前回同様、秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。この日はまず、足踏み脱穀機による脱穀や唐箕による選別を体験した後、箸こぎ、臼と杵による糲すり、てみとザルによる選別を体験した。この作業は大変手間がかかり、約2.7kgの玄米を精米するのに参加者・関係者約15人で約3時間を要した。残りの糲は精米機で糲すりを行い、全収穫量を計量した結果、玄米で約8kgであり、昨年の10kgよりもやや少ない収穫量となった。昼食には土器や羽釜で赤米入りご飯を炊いたほか、アサリの潮汁、ニジマスの塩焼きや豚汁風の芋煮をつくった。赤米は現在のお米よりもやや硬いものの、ほのかに甘い味であった。その他の食事も美味しく好評であった。



写真57 種まき（4月19日）



写真58 館長挨拶（5月26日）



写真59 縄ない（5月26日）



写真60 苗の観察（5月26日）



写真61 田植え（5月26日）

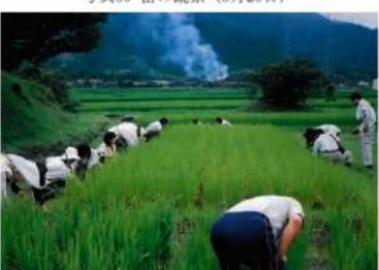


写真62 雑草とり（7月21日）



写真63 土器づくり（7月21日）



写真64 稲の観察（9月22日）



写真65 収穫具の説明（9月22日）



写真66 木庖丁による収穫（9月22日）



写真67 参加者の皆さん（9月22日）



写真68 白と杵による脱穀・麹作り（10月6日）



写真69 土器による炊飯（10月6日）



写真70 食事風景（10月6日）

公開授業を終えて

今回の公開授業について、参加者からは「お米ともみ殻を分けるのが大変でしたが、がんばって赤米になったときはうれしかった」（小学生）、「体験を通して学ぶことの大切さを教わった」（学生）、「食べ物に対する見方がかわりました」（学生）、「お米を食べるまで多くの手間と時間がかかることがわかった」（一般）などの声が寄せられ、授業の目的を達成することができたと感じている。また、小学生、一般の方、本学教職員、学生など、様々な世代の方が体験や食事の際に協力して作業を行い、交流を深めていたのも印象的であった。一方、今回は昨年よりも稲の生長が悪く、収穫量が減少するなど、稲作の難しさを改めて体感した。以上、参加者をはじめ、教育学部の関係者など多くの方々に支えられて、盛況のうちに公開授業を終了することができた。館員一同心より御礼申し上げたい。

『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』を開催

主 催：特定非営利活動法人 子どもとともに山口県の文化を育てる会

「心をかたちに」～子どもたちの粘土の未来～実行委員会

共 催：山口大学埋蔵文化財資料館

参加校：山口県立防府養護学校・周南養護学校・豊浦養護学校・山口養護学校・山口大学教育学部附属特別支援学校

会 場：社会福祉法人曉会 養護老人ホームやはぎ苑敷地（山口県防府市江波179）

平成19年度、当館の新たな取り組みとして地域NPO法人との連携事業を開催した。実施した『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』は、参加校の児童が自由に造形した粘土作品を、弥生時代の土器焼成方法として推定されている「覆い焼き」で焼き上げるという内容である。ワークショップは本学教育学部生約40名の授業の一環としても取り入れられ、平成20年1月26日～27日にかけて開催された。以下に内容を紹介する。

1月26日（土）

午前11時に現地集合し、参加者へ趣旨説明（写真71）を行った。次いで舞いきり方による古代の火起こしを体験した（写真72）。約40名で10回以上の点火に成功し、種火を窯点火用の炭に移した。

午後からは築窯に取り組んだ。今回は降雨による窯内への浸水を防ぐため、基礎に耐火煉瓦を敷き、その上に藁と薪を積み上げ、作品を並べ置いた（写真73）。児童の作品は小さいものが多く、かつ繊細な細工が施されているもののが多かったために慎重に行った。その後、全体を藁で覆い、最後に水で練った赤土を窯全体に塗りつけた（写真74）。厳しい寒さの中、手を悴ませながらの作業であったが、参加者全員根気よくを行い、5基の窯が完成した頃には既に夕暮れ時を迎えていた。

午後4時過ぎに窯に点火し（写真75）、学生参加者は解散した。焼成には一昼夜必要であるため、その後は資料館員と実行委員会スタッフが交替で窯番を行った（写真76）。覆い焼きでは窯内温度が緩やかに上昇していくが、今回温度計測を行った窯では午前3時30分に820℃の最高温度を記録した。

1月27日（日）

点火から19時間後の午前11時には窯内温度が約100℃にまで下降した（写真77）。計画では昼頃には作品を取り出す予定であったが、未だ高温を保っていたため午後3時に繰り下すことになった。

午後3時、資料館員と実行委員会スタッフ、参加校教員で窯の解体と作品の取り出しを行った。多少の破損はあったものの、全体的には良く焼成されており、見事に赤橙色（弥生土器の色）に焼き上がっているものも数多く見られた（写真78）。

ワークショップを終えて

当館の覆い焼きによる弥生土器焼成実験は、平成16年度に実施した公開授業に端を発している。その後、学術研究とともに市民への体験学習の提供を目的に焼成実験を継続してきたが、今回は養護学校児童の粘土作品を弥生時代の技法で焼成するという試みであり、現代芸術と古代の技術がどのように融合するのかが注目された。完成した作品はいずれも覆い焼きならではの暖かみのある色に焼き上がりており、焼きむらや黒斑も作品の一つの個性となっているように感じられた。

当館初のNPO法人との共催イベントであり、様々な面で関係者の方々に助けられての実施となった。会場を提供いただいた養護老人ホームやはぎ苑の皆さん、実行委員会スタッフ、学生諸君、そして参加校の児童・教員に感謝の意を表したい。

完成した作品は、翌年度に山口県庁1階ロビーにて展示される予定である。美術作品展ではあるが、当館の特色を生かした資料展示で参加する予定である。



写真 71 ワークショップ参加者(山口大学学生)の皆さん



写真 72 薪を点火させるための火を起す



写真 73 薪の上に子供たちの作品を並べる



写真 74 薪を被せ、全体を粘土で覆うと窯が完成



写真 75 5基の窯を順次点火させる



写真 76 窯は約24時間燃焼を続ける



写真 77 燃焼終了



写真 78 見事に焼き上がった作品



写真 79 光市小周防相ヶ迫出土品

付篇

光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器

横山 成己

1. 資料の由來

まずは扉写真（写真79）をご覧頂きたい。現在、山口大学埋蔵文化財資料館には山口県熊毛郡周防村（現：光市）大字小周防小字相ヶ迫の地にて発掘された土製経容器1組と、土師器皿15点が収蔵されている。本資料に関しては平成13年にその存在を断片的に公開しているが、平成16年に刊行された『山口県史 資料編考古2』では残念ながらその集成に漏れており、後に刊行された県内経塚遺跡の調査報告においても相ヶ迫出土資料が認知されていない状況にある。全ては長年にわたり正式報告を行わなかつた当館の怠慢に因を発することであり、記してお詫び申し上げるとともに、遅ればせながらここにその責を果たしたいと思う。

本資料には由来書とも呼べる記録紙が1枚付随している（写真80）。以下にその内容を記す。

【表面】

遺物名 有蓋円筒状壺及び皿

発見地 山口県熊毛郡周防村大字小周防字下小周防小字相ヶ口（迫）

発見者～発掘者名 弘 律之進

発見～発掘年月日 発見10年前 発掘日（昭？）.26.5.27.

出土状況 花崗岩の開折谷斜面に花崗岩の地肌を僅かに掘り込み表土に露はれていた。蓋及び皿は重ねられて15枚入っていた。

所蔵者 山口大学

上記の内容でやや不可解であるのは「発見～発掘年月日」に関する記述である。この記述に若干の考察を加えてみよう。

昭和25年から28年にかけて、島田川流域の広範囲を対象に山口大学島田川遺跡学術調査団による発掘調査および踏査が実施されていたことは周知の通りである。その成果報告書である『島田川周防島田川流域の遺跡調査研究報告』（以下『島田川』）には小周防相ヶ迫に近接する周防村大字下周防中郷遺跡の調査成果報告が掲載されるとともに、「周防村の遺物散布地と包含層」として、次の文が掲載されている。「既述の遺跡のほかに原始時代の集落址と推察せられる遺物散布地と包含層が、昭和26年5月27日の踏査によって明らかになった」つまり、記録紙に発掘日として記されている昭和26年5月27日とは、山口大学島田川遺跡学術調査団が周防村の踏査を実施していたまさに当日なのである。



表面

写真80 資料由来記録紙

裏面

この事実から推察すると、以下の経緯が復元されよう。

1. 昭和16年頃、弘律之進氏により小周防相ヶ迫の開折谷斜面に土製経容器が発見される^{註6}。
2. 10年後の昭和26年5月27日、周防村の踏査に訪れた山口大学島田川遺跡調査団に土製経容器の存在が伝えられる。
3. 同日、調査団により土製経容器が発掘される。
4. 山口大学に土製経容器・土師器皿が収蔵されるも、『島田川』に報告されず現在に至る。

2. 小周防の歴史環境と出土地の特定

現在光市北部に位置する小周防の地は、岩国市周東町に源を発し、玖珂盆地、熊毛低地を経て光市で周防灘に流入する二級河川島田川の中流域に該当する。周防（小周防）の名が示すとおり、この地は周防（周防）国造の本拠と推定されており、沙塵（佐波）県に周芳国府が新置された後に古（小）周防と呼ばれるようになったと目されている。また、周芳国造の部内においては新羅より帰化した秦氏の存在が指摘されている^{註7}が、小周防の南に隣接する大字立野の北端、島田川が西に蛇行する左岸の長徳寺山と呼ばれる標高約60mの低丘陵の南方斜面中腹に長徳寺山古墳第1号墳がある。古墳は昭和40年（1965）に発掘調査が実施され、玄室長3.1m以上、奥壁幅1.45mの横穴式石室墳であることが確認された。玄室内からは土師器壺2点、須恵器高台付环身2点、須恵器壺蓋2点、圭頭大刀1点、刀子1点等が出土しており、その内容から6世紀末に築造され8世紀代まで追葬が行われた墳墓と推定されているが、注目されるのは同一丘陵上に所在している長徳寺が所蔵する新羅系陶質土器の有蓋高壺である。この資料は、現在では消滅したが寺の付近にあった古墳から出土したものと伝えられており、4基程度存在したとされる長徳寺山古墳群の被葬者像を知る上で重要な資料となっている。

律令制度下での小周防には、当初周防国に設置された五郡（大島郡・熊毛郡・都濃郡・佐波郡・吉敷郡）の内の熊毛郡家（郡衙）が設けられたと考えられており、郡家移設後も平安時代を通して国衙領であったが、鎌倉時代に至ると内藤氏が地頭として長く領知することとなり、国衙領としての実質は失われたとされている。

さて、本資料の出土地点に関しては「山口縣熊毛郡周防村大字小周防字下小周防小字相ヶ迫」という発見地名と、記録紙（写真80）の裏面に描かれた「発見地～出土平面略図」の限られた手掛かりしか与えられていない。現在の小字地図で見ると、相ヶ迫は島田川左岸に熊毛丘陵から派生する小起伏丘陵地内に位置する（写真81）。記録紙に記された通りこの丘陵は花崗岩質の岩盤が複雑に浸食されており、狹小な開折谷が不定方向に入り組んでいる。実際に相ヶ迫の地に立つと、東西南北の視界が完全に遮断されており（写真82）、多くの場合眺望の良い景勝の地が選ばれる経塚の立地としては極めて特異な状況と言える（図34）。僅かに相ヶ迫の北西に近接する「奥ノ坊」という小字名が経塚との関連を想像させるに過ぎない。

次に記録紙に関してみると、小周防周辺の略地図と推定される。「×」が出土地を示すのである。右上一左下に引かれた二重線や蛇行する一本線は道を示すと考えられることから、「文」印が特定できれば出土地への道程が推察できるものと思われた。現在、小周防北部の島田川左岸に光市立周防小学校が存在することから、これを「文」印と見て調査を進めたが、資料出土時の昭和26年には前述した長徳寺付近にも周防中学校が存在していたことが判明したため、道程の確定には至らなかった。小字相ヶ迫の踏査も実施したが、塚状遺構も発見できていない。もっとも、記録紙の出土状況を読むと「谷斜面に露出」となっており、元来塚状の施設がなかったか、発見時には封土が流失した状況であった

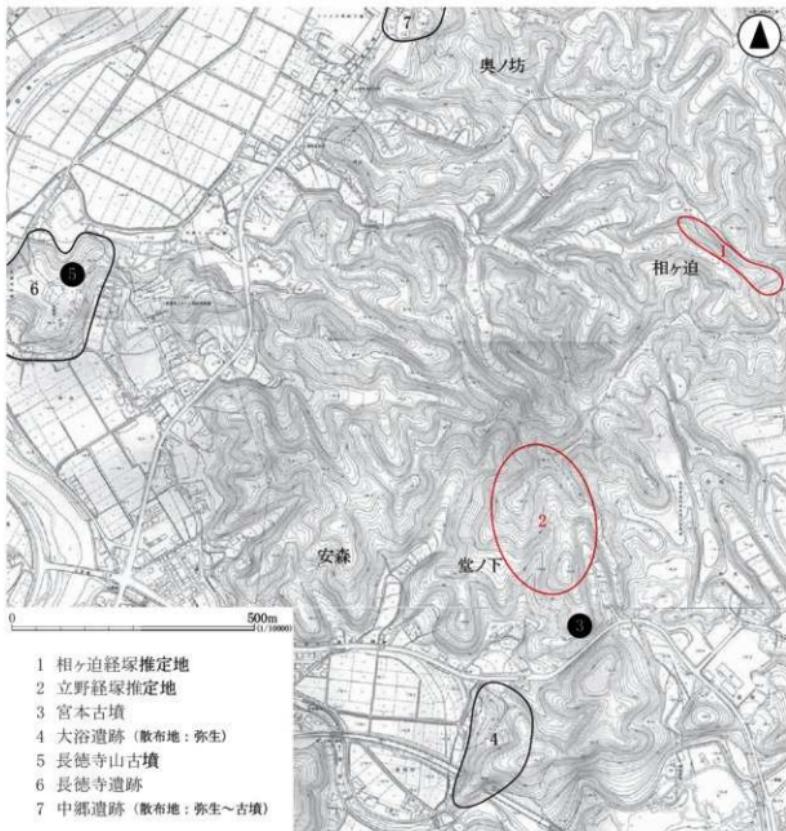


図34 小周防相ヶ迫位置図



写真81 遺跡地遠景（北西から）



写真82 小周防相ヶ迫の遺跡推定地（南東から）

ものと思われる。現状としては、小字相ヶ迫の北縁を北西—南東方向に伸びる山道周辺をその推定地として挙げるに止みたい。

ところで、旧周防村には旧来「立野経塚」として知られる経塚遺跡が知られているが、今日まで遺跡分布図等に詳細な位置が特定されていない。よってここに合わせて報告を行う。

立野経塚の発見は古く、大正6年（1917）8月中旬に地元出身の京都法科大学の学生である鬼武義彦氏と土地所有者等により発掘され、鬼武氏により出土品が京都文科大学考古学研究室に持ち込まれた。^参同年12月には島田貞彦氏により『考古学雑誌』上に報告されるに至るが、ここにその内容を要約しよう。

【経塚の位置】

山口県周防国熊毛郡周防村字立野堂ノ森通山正次郎氏所有山林で島田川上流約二里（約8km）の標高約100mの小山山頂

【経塚の構造】

高さ五尺（約1.5m）、周囲六七間（約11～13m）の封土があり、発掘は封土の北東部から横穴を掘り進める形で行われた。封土内部には径五六寸（約15～18cm）の自然石が積み重ねられており、その下底中央に銅製経筒が安置されていたが、身と蓋の間に素焼製の壺が覆い被されていた。経筒の下部より白磁片が、経筒の下底一尺（約30cm）の下層に和鏡四面が散在していた。

まず問題となるのは経塚の位置についてである。島田氏報告には「字立野堂ノ森」とされているが、現在「堂ノ森」という小字名は伝えられていない。現在伝わる字名を見ると、相ヶ迫の南西約500mの丘陵先端地に「堂ノ下」という小字名があり、西に接して「安森」という小字名も確認できる。「堂ノ森」は両者が混同した結果と考えられ、現在でも小字堂ノ下の丘陵下に通山姓の家屋が存在することから見ても、当地の標高100m前後の丘陵頂部が立野経塚推定地と見なして良かろう。

出土遺物については、当初京都文科大学考古学教室に保管されたようであるが、柏本秋生氏が指摘するように、山口大学人文学部考古学研究室に所蔵されている銅製経筒が立野経塚出土品と確認される他は散逸してしまったようである。

経塚の構造に関しては、横掘りによる発掘ということもあってか不可解な部分の多い報告内容となっている。特に素焼製壺については、島田氏報告では「高さ約七寸、径約五寸の素焼製にして経筒の蓋と身との間に置かれしものなり」とされているが、報告に示された実測図によると、身蓋を合わせた銅製経筒のサイズが全高6.7寸、蓋径4.75寸であることから見て、素焼製壺は経筒全体を覆う外容器であった可能性が高い。^参

以上が相ヶ迫経塚と立野経塚の遺跡地に関する調査報告となる。両者とも推定地を提示するに止まつたが、今後更なる特定作業が進み、遺跡地図等に明示されることを切に願う次第である。

3. 遺物

【土製経容器】（図35、写真83、表6）

土製経容器は、平底円筒形の身と、つまみ付き被せ蓋からなる。蓋は約1/2が、身は上半部の約1/2が消失している。両者とも内外面共に風化が全く見られない状態と言つて良く、製作当時の趣をそのまま伝えている。

a. 土製経容器蓋

復元口径21.2cm、器高3.8cmの輻輳成形品である。天井部は外縁から中央部に向けて緩やかに凹んで

おり、中央に直径4.0cmの扁平なボタン形つまみが付けられている。口縁は緩やかに外反し、端部は丁寧に面取りされている。また、天井部外面には板状压痕が観察されることから、撮みが付加される前段階に板上で半乾燥が行われたものと思われる。

b. 土製経容器

復元口径19.4cm、底部径20.4cm、器高39.9cmの円筒形を呈する。法量に比して極めて薄づくりである底部外周に、ほぼ垂直に粘土を積み上げて体部を形成している。器壁の厚みは約1cmであり、2cmから7cm間隔で接合痕が観察されるが、概ね5cm幅が基本単位となっている。接合痕を見ると回線状に明瞭に痕跡が残る接合部位と、緻密な器面調整が行われている接合部位があり、成形における作業単位を示すものと思われる。

部位的な特徴としては、底部は裾が外にやや張り出す形状を見せるが、これは粘土紐接合時の強い指押さえによるもので意図したものではなかろう。口縁部はやや内傾させ、上端部に面取りを行っている。また、粘土の折り返しにより外端部を肥厚させる玉縁状口縁となっている。口縁部の内傾は蓋口縁の外反と傾斜度を一にしており、意匠として成形されたものである。本例のように口縁部を内傾させるもの、もしくは段を有して被せ蓋の受け部をつくり出すものは、銅製・土製・陶製・瓦製問わず経筒もしくは経筒外容器にしばしば見られる形態であり、本資料もその一例であろう。

器面調整については、内面は板状工具による横方向、斜め方向のハケ痕が明確に残っている。外面は縦方向のハケ調整が基本となっているが、全体的に大まかにナデ消されている。

全体的に見ると、本資料は器壁の薄さなど精巧なつくりと言つて良いが、器面調整や接合痕の処理などは大雑把に仕上げられており、どこからかぐらん印象を受ける。なお、筒の内底面、蓋の天井部内面に紙本経等が存在したことを窺わせる痕跡は残っていない。

【土師器皿15点（1～15）】（図36～38、写真84～86、表6）

土師器皿15点は全て完形または完形に復元される資料である。土製経容器同様全く風化を受けておらず、由来記録書に記されているように経容器内に重ねて納入されていたのであろう。

15点とも形態に差はなく、糸切りされた平底の底部を持ち、体部は外反しながら大きく外方に広がり口縁に至る。口縁端部は指ナデにより明確に面を形成するものとやや丸みをおびるものがある。口径は7.9～8.7cm、底部径は4.5～5.1cm、器高は1.6～1.95cmの範囲に収まる。

これらの土師器皿の内、11と15は口縁部の煤痕から灯明皿としての使用が認められる。しかしながら、煤痕の状態から灯明皿としての使用は1回に限られるようであり、これらの土師器皿が経容器埋納に関連して生産・使用されたこと想像させる。逆に述べれば、口縁部に明確な煤痕の観察できない土師器皿は、灯明皿以外の用途で使用されたと考えられるため、写経後、埋経に至るまでの供養行為を考察する上で極めて重要な考古資料となろう。

本資料の所属年代に関しては、山口県東部、島田川流域における古代から中世にかけての土師器編年が確立されていない現状で多くを語り得ないが、遠く周防国府跡に目を向けると吉瀬勝康氏により12世紀代に位置づけられている周防国府跡SK2000、SE6780出土の土師器皿が本資料と年代的にはほぼ並行関係にあるものと思われることから、現状としては12世紀中頃を中心に土師器皿の年代を考えておきたい。この年代観は列島における経塚造営の初期繁榮期に当たり、上述したようにこれらの土師器が生産から埋納までほぼ時間差がないものと、換言すると供養行為を経て経塚（経容器）に埋納することを目的に生産されたと考えるならば、遺跡の所属年代を直接的に示す資料となり得るものである。周辺域での同時代の遺跡調査が進行すればその位置づけがより明確化されるであろう。

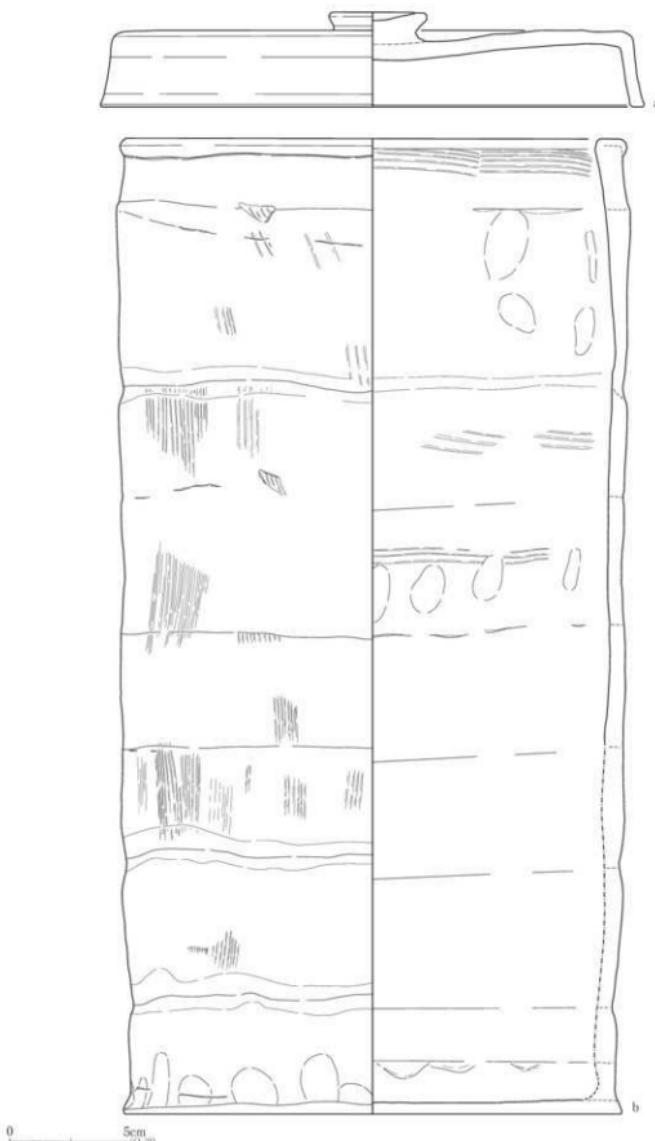


図 35 土製経容器実測図

光市小間防相ヶ迫出土の土製経容器



写真 83 土製経容器蓋・身

光市小間防相ヶ迫出土の土製経穴器

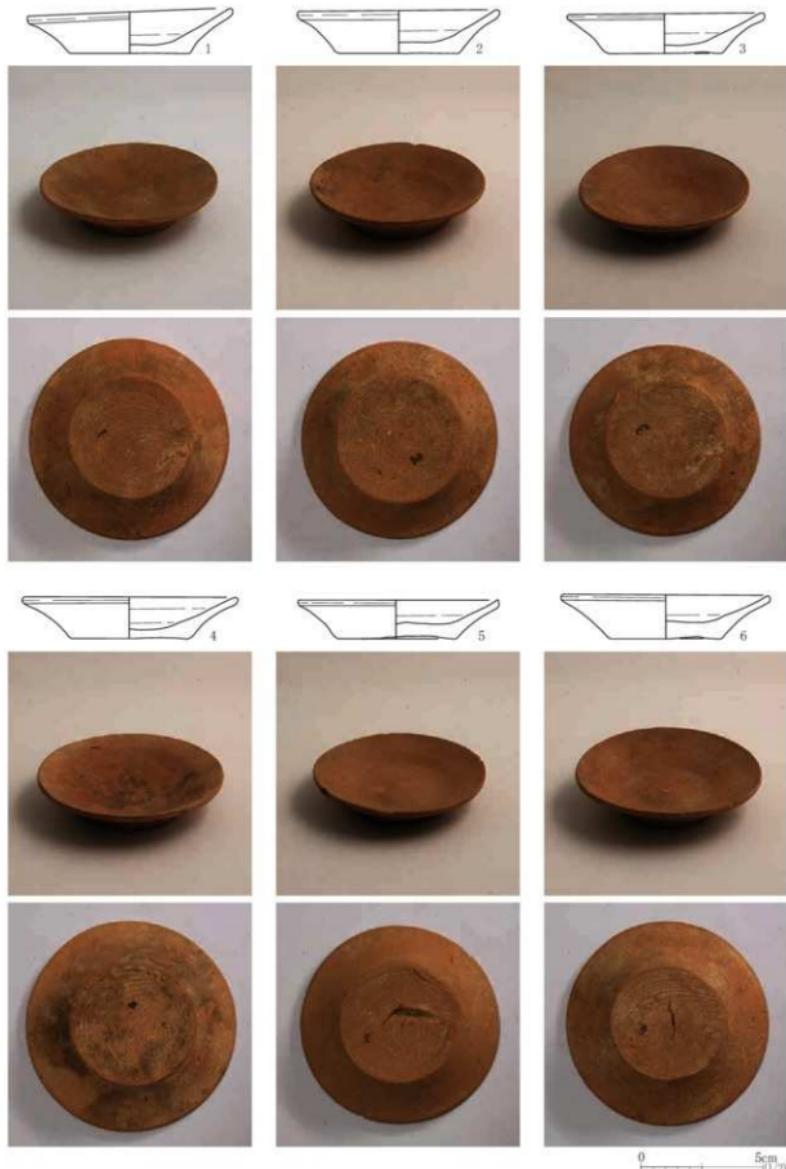


図 36・写真 84 土師器皿 1 ~ 6

光市小間防相ヶ迫出土の土製経穴器

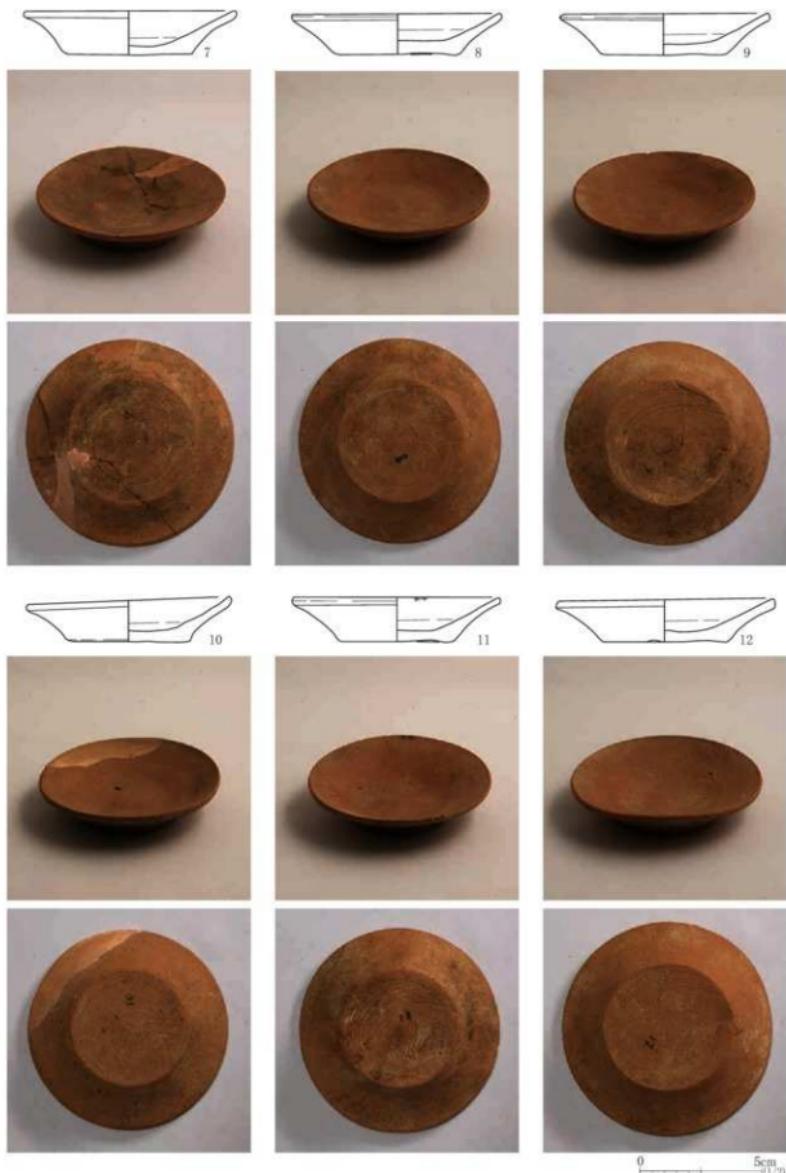


図 37・写真 85 土師器皿 7 ~ 12

0 5cm



図38・写真86 土器器皿13～15

表6 出土实物観察表 法量()は復元値

遺物番号	造構層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③脚高 (括弧内) 振み径4.0	色調 ①外面 ②内面 (1)にぶい褐色(7.5YR6/4) (2)にぶい橙色(7.5YR7/4)	胎土	備考
a	丘陵傾斜地 (耕塗か)	土製経容器 薩	1/2欠失	(1)21.2 (2)33.8 (3)8.0	(1)にぶい褐色(7.5YR6/4) (2)にぶい橙色(7.5YR7/4)	密 金雲母極少量混ざる	天井部外側 板目压痕
b	丘陵傾斜地 (耕塗か)	土製経容器 身	上部のみ 1/2欠失	(1)19.4 (2)20.4 (3)39.9	(1)(2)にぶい褐色(7.5YR7/4)	密 金雲母極少量混ざる	
1	経筒内	土師器 盆 1	完形	(1)8.3 (2)4.9 (3)1.8	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
2	経筒内	土師器 盆 2	完形	(1)8.1 (2)5.0 (3)1.8	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
3	経筒内	土師器 盆 3	完形	(1)7.9 (2)4.7 (3)1.65	(1)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
4	経筒内	土師器 盆 4	完形	(1)8.6 (2)4.9 (3)1.7	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y7/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
5	経筒内	土師器 盆 5	完形	(1)8.1 (2)4.8 (3)1.6	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
6	経筒内	土師器 盆 6	完形	(1)8.4 (2)4.5 (3)1.8	(1)にぶい褐色(7.5YR7/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
7	経筒内	土師器 盆 7	完形	(1)8.5 (2)5.1 (3)1.8	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
8	経筒内	土師器 盆 8	完形	(1)8.4 (2)5.0 (3)1.7	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y7/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
9	経筒内	土師器 盆 9	完形	(1)8.5 (2)5.0 (3)1.7	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
10	経筒内	土師器 盆 10	完形	(1)8.2 (2)4.8 (3)1.85	(1)にぶい褐色(7.5YR7/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
11	経筒内	土師器 盆 11	完形	(1)8.35 (2)4.7 (3)1.8	(1)にぶい褐色(7.5YR7/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	灯明皿 底部糸切跡
12	経筒内	土師器 盆 12	完形	(1)8.7 (2)5.0 (3)1.8	(1)にぶい褐色(7.5YR7/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
13	経筒内	土師器 盆 13	完形	(1)8.3 (2)4.9 (3)1.9	(1)にぶい褐色(7.5YR6/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
14	経筒内	土師器 盆 14	完形	(1)8.6 (2)4.9 (3)1.8	(1)(2)にぶい褐色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切跡
15	経筒内	土師器 盆 15	完形	(1)8.3 (2)4.7 (3)1.95	(1)にぶい褐色(7.5YR7/4) (2)にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	灯明皿 底部糸切跡

4. 器種の特徴

本稿では当資料が経巻を納入する容器、即ち「経容器」であることを前提にここまで報告を進めてきたが、銅製以外のもので経筒と呼称される容器が「骨蔵器」である可能性を有することは古くより指摘された事¹¹¹であり、特に九州における陶製転用経筒においては、骨蔵器による使用か経筒による使用か判別に苦しむ場合が多い。確かに当資料のように内部に何ら経巻の痕跡を有せず、共伴遺物も土師器皿のみのものを経容器と断定するのは困難と思われる。さらには、当資料のように径、器高とも経筒としては極めて大型の部類に属する容器が単独で出土する場合は経筒外容器として報告される場合が多い。果たして当資料を埋経のための容器と認定して良いものであろうか。

まずは事實関係を再確認したい。当資料は、花崗岩質の地山を僅かに掘り込み埋納され、内部には土師器皿が重ね入れられていたとされる。経筒は石室状の空間に木炭等を詰め、除湿効果を高めた上で納める例が多いものの、何ら外郭施設を設けず埋め置かれる場合も散見されるため、本資料の発見状況をもって経容器・骨蔵器の判別はつけがたい。重要視すべきは土師器皿の納入状況であろう。由来記録紙には「重ねられて」としか記されていないが、土製容器の径から土師器皿を安定して納入するには1段または2段で重ね入れる他方法はない。試しに15枚の土師器皿を1段に重ねてみると、その總高は14cmもの高さとなり、容器に入れた際にも周囲の空間が広く不安定な状態となる。一方2段に分けて重ね置かれたと考えると各段はおよそ7~8cmの高さとなり、この状態で土製容器に納入されていましたと仮定すると容器内にはなおも直径約18cm、深さ30~31cmの余剰空間が存在することになる。

さて、一般写経における料紙の天地幅は通常約28cm前後で、経塚から発見される経巻の天地幅は平安時代のものは大体これに近く、時代が降るとともに短くなることは既に周知のところである。¹¹² 経巻の天地幅は即ち経筒の身部高を規定する要素となる。当県において経巻が遺存していた例を見ても、銅製経筒が発見された阿武郡阿武町所在の御山神社経塚¹¹³では筒身高26.0cmの経筒に天地幅25cmの法華経8巻が納められており、同じく銅製経筒が出土した防府市所在の日輪寺経塚¹¹⁴においても筒身高20.6cmの経筒に天地幅19.5cmの法華経8巻が納められている。この様に経筒は経が納入できる容積さえ満たしておればその本来的な役割を果たし得るのであり、余剰空間を必要としないものである。これは銅製経筒に限らず土製等の専用経筒においても同様であろう。

以上の点を重視すると、相ヶ追出土の土製容器内に想定される深さ約30cmの空間は、その容積からやはり経巻を納入するためのものと考えて良いのではなかろうか。ただしこの場合においても本資料が「経筒」であるのか「外容器」であるのかに問題を残す。相ヶ追出土品は、発見時の状況から想像するに埋納後、後世に内容物の一部が抜き取られたとは考え難いが、経筒には現在まで金属製品、陶磁・土製品、石製品、そして木製品の存在が知られており、組成容器内に有機質の経筒が存在した可能性を否定できない。現状では当資料に対して「経容器」という名称を与えておくに止めたい。

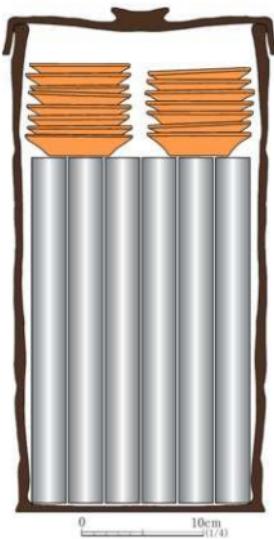


図 39 紙本經・土師器皿納入模式図

5. 山口県出土の土製経容器

現在山口県で確認されている土製（土師質）経容器は、当資料以外では真尾猪の山遺跡（防府市大字真尾）IV地区出土品、平原経塚（周南市大字戸田）出土品、中宮経塚（下松市大字河内）出土品の3例を数えるのみである。資料数が極めて限られる状況ではあるが、細身で法量が銅製経筒とさほど大差ないもの（仮称A類：図40-6・7）と、太身で法量の大きいもの（仮称B類：図-8・9）に大別しておく。

山口県に出土する経筒（経容器）資料については、過去に山口県内の経塚遺物を概観した柏木秋生氏により「鉄銅製経筒は、九州の影響を受けて在地でつくられたと考えられるものが多く、直接九州から移入されたと考えるものは少ない。いっぽう、貿易陶器も多数用いられている。種類からみて、九州からもたらされたものと思われる。地理的な関係もあり、やはり九州的な経塚造営が行われていたとみるべきだろう。」と指摘されている。

確かに古く小田富士雄氏によって「九州型経筒」として位置づけられた鉄銅製積上式経筒に関しては、伝承品であるが長門一の宮（下関市一の宮本町）から二段積上式の経筒が、同じく伝承品であるが松尾山光明寺天皇院経塚（防府市大字真尾）から四段積上式の経筒が出土したとされており、九州北部地域との強い関係が想像される。この他にも、福岡県を中心に九州北部に分布するもので、鉄銅製経筒で筒身の上・中・下部3ヶ所に突帯を巡らし、宝珠紐の付く被蓋式傘蓋を有する等の特徴をもつタイプのものが広沢寺経塚（山口市黒川）から出土しており、広沢寺例と同様のタイプが2口、松尾山光明寺天皇院経塚から出土したと伝えられる。

同じく小田富士雄氏により「九州型経筒」として位置づけられた陶製経筒に目を向けると、山口県内では小田氏分類によるI類・II類ともに散見される状況にある（図40-2～5）。靈仙寺跡（佐賀県吉野ヶ里町）の調査成果から小田氏分類に検討を加えた杉山洋氏の分類案を引けば、長谷経塚（宇部市大字西岐波）出土品はI類A、東分中村経塚（美祢市大嶺町）出土品はII類A、王子の森墳墓群（山口市朝田）採集品はII類Cに該当する資料である。また、上野経塚（長門市油谷向津具上）出土の陶製経筒3口の内1口はII類C、他2口は四耳壺であるが、九州北部によく見られる経筒に転用された宋時代の長胴壺にその系譜が求められる。

この様に、県内全ての鉄銅製・陶製経筒（経容器）が九州北部の影響下に搬入・製作されたとまでは言えないが、柏木氏の指摘通りその強い関係性は首肯されよう。それでは、土製経容器に関しては如何なる傾向が見出せるであろうか。

まずA類に関しては、類例は妙楽寺経塚群（大分県宇佐市）採集品や、（伝）求菩提山経塚（福岡県豊前市）出土品など、やはり九州北部に散見される。しかし、「印籠蓋造り」土（瓦）製経筒については香川県、徳島県など四国地域の経筒口縁部の特徴との指摘もあり、一概に九州北部との関係のみで捉えることはできない。

B類に関しては、平原経塚出土品（図40-8）と小周防相ヶ迫出土品（図40-9）との間に形態差が大きい。まず平原出土の筒身は、器高約40cm、口径約25cmと小周防相ヶ迫例よりひとまわり大きく、器壁も分厚い。口縁端部は段こそ有さないものの明確に内傾させている。報告者の指摘にもあるが、蓋は土師器坏を逆さまにしたものに宝珠形のつまみを附加したものである。山口県内では唯一の経容器形態であるが、参考となる資料にやはり四国地方、香川県、徳島県に分布する瓦製・土製経筒、外容器が挙げられる。近年、片桐孝浩氏により香川県出土の十瓶山窯産の瓦質経筒外容器（瓦質筒形土器）の分類・編年案が提示されている。氏は口縁部形態により段状の受け部を持つI類と、口縁端部が体部からそのまま方形に終わらせるII類とに分類し、外面に施されている調整を基準にI～V期に編年しているのであ

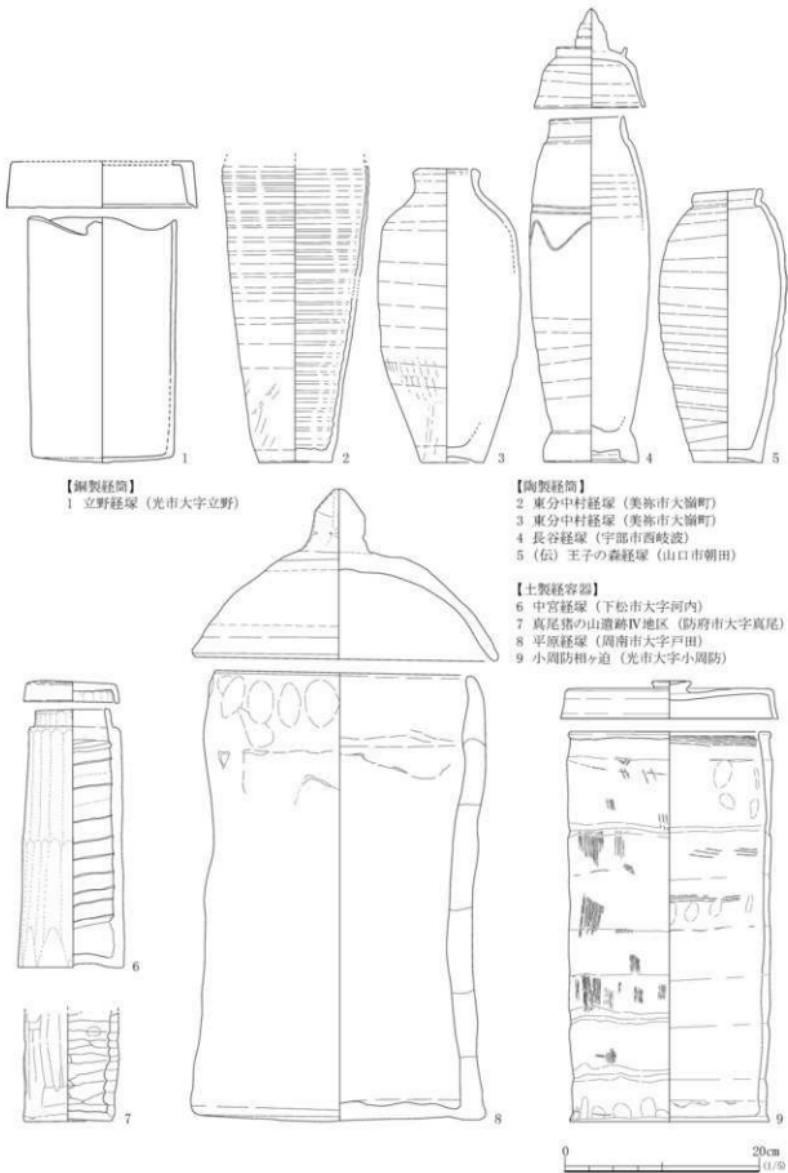


図 40 山口県出土の経容器

るが、平原経塚出土の簡身は、法量の差こそあれII類の後半期（片桐氏のIV・V期）の形態に極めて近い。片桐氏はIV期を12世紀第4四半世紀、V期を13世紀の第1四半世紀に比定しているが、平原経塚に関しては蓋の形状が13世紀代の坏に近似することから同時期の年代が示されている。土師質、瓦質の差は看過できないものの、形態的特徴、年代から四国東部瀬戸内沿岸との関係も指摘しておきたい。

一方、小周防相ヶ迫出土品は、口縁部を内傾させる形態は同様であるものの、平原経塚出土品に比して器壁も薄く、極めてシャープなつくりとなっている。蓋も専用蓋として作製されており、両者を大型土製経容器（B類）として一括することに躊躇を覚える。所属時期に関しても、小周防相ヶ迫出土品は共伴する土師器皿から12世紀中頃にその時期を求める、平原例と時期的に乖離する可能性が高い。現状では、近接地から出土した立野経塚出土鉄銅製経筒（図40-1）との形態的な類似から、「銅製経筒模倣の土製経容器」と位置づけたい。

6. おわりに

以上、当館出土の土製経容器について資料紹介とともに若干の考察を行った。山口県内に限らず、経塚遺物は古くに発掘されたものが多く、また出土品が国立博物館蔵、寺社仏閣蔵、個人蔵品である場合も多い。特に今回取り扱った平安時代末～鎌倉時代初頭の初期経塚に関しては、県内の新規発見も稀であることから、考古学研究の対象にし難い部分も多かったものと想像される。筆者も経塚及びその遺物に対して甚だ浅学であり、事実誤認等あればお詫び申し上げる次第である。

本稿を成すにあたり古賀信幸氏（山口市史編さん室）には貴重な経塚データをご提示いただいた。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。

[註]

- 1) 昭和30年（1955）に光市に編入。
- 2) 文献27の8頁に遺物写真を公開している。
- 3) 真尾猪の山遺跡IV地区（府下市）出土の土師質経筒の報告においても、「山口県内出土の土師質の経筒は周南市平原経塚、下松市中宮経塚の2例である」と記されている（文献26の85頁）。
- 4) 文献9の99項
- 5) 『島田川』には本資料に関する記述は見られない。これは『島田川』巻末に所収されている附録が「山口県先史時代遺跡遺物発見地名表（1950年以降）」とあることから見て、あくまでも調査の対象を先史時代に限定した結果と考えられる。
- 6) 弘律之進氏については、山口大学島田川遺跡調査団の一員とも想像したが、『島田川』に記されている踏査協力メンバーにも名が見られないため、地元住民と想像しておく。
- 7) 文献32a・b
- 8) 『周防國秋河郷戸籍』（石山寺蔵）には秦氏と称する戸主が五人、戸口に二十数人あるとされる（文献32a）。
- 9) 文献32 b の109～118頁
- 10) 文献31の92頁
- 11) 善光五年（721）に熊毛郡が二郡（熊毛・玖河）に分割された際に熊毛郡家は小周防から去り、熊毛郡大野（平生町）に移されたと解されている（文献29）。
- 12) 明治9年（1876）に小周防東・西小学校が統合され現在地付近に移転し、昭和22年（1947）には周防村立周防小学校と改称。昭和30年（1955）の光市編入に伴い光市立周防小学校と改称。
- 13) 昭和42年（1967）に三島中学校と統合し島田中学校へと移転。
- 14) 昭和4年（1929）に発行された『防長和鏡の研究』の著者である弘津史文氏は、周防村字立野小字堂ノ森経塚について「著者

- は大正五年此の地を調査し経塚なるべしと発表せし事あり」(文献29の43頁)と記しており、発掘以前より地元考古学研究者には周知されていたものと考えられる。
- 15) 文献22
- 16) 文献1a
- 17) 素焼製壺の実物が現存せず、写真・実測図の類も確認できないため、あくまでも推定である。実際には経筒蓋径より外容器径が小さかったため、埋納時に経筒身→外容器→経筒蓋の順に重ねたのかも知れない。
- 18) 文献37
- 19) 周防国府出土土師器皿は本資料とは異なり体部が内湾しつつ広く外方に立ち上がる形態のものが目に付くが、口径・底部径・器高から見ると本資料と周防国府跡2遺構出土の土師器皿はほぼ同形と言える。
- 20) 文献3 3aの277頁
- 21) 佐賀県東背振村(現:吉野ヶ里町)に所在する慈仙寺跡では経塚群とともに墓域が検出されているが、両者に用いられた陶製容器には明確な差が見いだせない(文献28)。
- 22) 文献36aの81頁
- 23) 文献10・38
- 24) 文献30a、b・36 b
- 25) 現在までに確認されている木製経容器には、和歌山県高野山奥之院経塚、京都府花脊一号経塚、福岡県四王寺山第一経塚、山形県遊佐町金保経塚出土例が挙げられるが、これらは銅製・陶製経筒の内筒と見なされている(文献33b)。一方『如法經現修作法記』(嘉祐二年(1236)宗快撰)の「如法經筒奉納次第」には「～(略)～筒鋼、或又用竹筒」と記されているが、京都府福知山市に所在する大道寺経塚で竹製経筒が2点出土しており、同じく福知山市高田中世墓・経塚群からは3点の竹製経筒の存在が確認されている(文献18)。前者は13世紀後半、後者は12世紀後半から13世紀初頭にその所属時期が求められているが、これらの竹製経筒は形態が銅製経筒と酷似していること、また外容器への埋納状況から明確に「経筒」と位置づけられている。
- 26) 文献26
- 27) 文献4・34
- 28) 文献11 b
- 29) 文献11 b の712頁
- 30) 文献7 c
- 31) 文献11 b
- 32) 文献8 寺実測図未公開
- 33) 杉山洋氏は、「以下の特徴を有するものを「四王寺山型経筒」として設定している。「①筒身部に三本の突帯がある。突帯は断面台形の幅広いもので、突带上に一条もしくは二条の沈線を入れることによって、二重もしくは三重の突帯となる。特に中段の突帯は、太い突帯の上下に細い突帯が接して付く、三重の突帯となる。②筒身部下端の高台が、横に張り出し台形に近い断面形をなす。多くは下段の突帯が高台に接しているため二段に張り出しているようにみえる。③蓋は被蓋式傘蓋となる。蓋端は身受け部から外側へ大きく外反しながら張り出す。先端部に小さな孔をあけ、環珞を垂下するものがある。また蓋の平面形を六角形とし、各頂点から環珞を垂下するものもある。④蓋の頂部には宝珠鉢が付く。宝珠は、円錐形の比較的大い頭の上に、平面円形の諸花と宝珠をのせる。⑤鉢の下、蓋の頂部に、鉢台と呼ぶ部分を持つ。一段高くするものと、突帯を円形に造らせるものとがある。」(文献23d)
- 34) 文献1・15a・25・30a 寺実測図未公開
- 35) 文献8 寺実測図未公開

- 36)『山口県史 資料編考古2』の文中において柏本秋生氏は広沢寺経塚出土経筒を「四王寺型経筒」と認定しているが、広沢寺例・松尾山光明寺天皇院例とともに見られる下段突帯が高台部から上方に離れて付く形態は、「四王寺型経筒」の登場と時を同じくして出現した杉山洋氏が指摘し提唱した「永満寺型経筒」の特徴に近い（文献23d）。
- 37) 文献20
- 38) 文献13
- 39) 文献35
- 40) 文献3・15a・30 奈実測図未公開
- 41) 瓦製と報告されており、蓋も発見されていないが、器形・法量とも中宮経塚出土品と酷似している（文献21）。
- 42) 奈良国立博物館蔵品であり、実測図の公開はされていないようであるが、「印籠造り」「土製（瓦製）経筒」など共通点が多く、法量も類似している（文献3）。
- 43) 文献21
- 44) 文献34
- 45) 文献12
- 46) 文献4

[文献]

- 1) 石川卓美（1972）『平川文化散歩』、山口市平川公民館、山口
- 2) 井口喜晴・高橋照彦（2000）『経塚出土陶磁展 6 九州地方に埋納されたやきもの』、奈良国立博物館・（財）佛教美術教会（編）、奈良
- 3) 井上喜久男・井口喜晴・高橋照彦（1999）『経塚出土陶磁展 中国・四国地方に埋納されたやきもの』、愛知県陶磁資料館、瀬戸（愛知）
- 4) 岩崎仁志（2004）『平原経塚』、山口県（編）『山口県史 資料編考古2』、山口
- 5) 大林達夫（2001）「井上山2号経塚」、防府市教育委員会（編）『井上山経塚・下山口遺跡発掘調査報告書』（防府市埋蔵文化財調査報告0111）、防府（山口）
- 6) 奥村秀雄（1979）『経塚』、『新版考古学講座 第8巻特論・上』、雄山閣、東京
- 7) a : 小田富士雄（1966）『九州発見の陶製経筒』、日本歴史考古学会（編）『日本歴史考古学論叢』、吉川弘文館、東京
b : 小田富士雄（1968）『西日本の石製経筒』、日本歴史考古学会（編）『日本歴史考古学論叢2』、雄山閣、東京
c : 小田富士雄（1970）『九州の経塚』、佛教藝術學會（編）『佛教藝術』76号、東京
- 8) 小野郷土史研究会（1988）『ふるさと小野』創刊号、防府（山口）
- 9) 小野忠熙・荒木清一・福尾藍市郎・浜田清吉・岡村義彦（1953）『島田川周防島田川流域の遺跡調査研究報告』、山口大学島田川遺跡学術調査团、山口
- 10) 柏本春次（1975）『御山神社経塚』、山口県文化財保護協会事務局（編）『山口県文化財』第5号、山口
- 11) a : 柏本秋生（1986）『II立野経塚出土の銅製経筒』、山口大学考古学研究室（編）『RELICS』第3号、山口
b : 柏本秋生（2004）『経塚関係遺物』、山口県（編）『山口県史 資料編考古2』、山口
- 12) 片桐孝浩（2004）『経塚出土の陶磁器－四国地域の様相－』、日本貿易陶磁研究会（編）『貿易陶磁研究』24号、東京
- 13) 河本芳久（2000）『東分中村経塚』、美祢市教育委員会、美祢（山口）
- 14) 河本芳久・樋田忠夫・池田善文（1983）『南原寺遺跡 第一次発掘調査概報』、美祢市教育委員会、美祢（山口）
- 15) a : 蔵田蔵（1966）『経塚論 10 東京国立博物館保管、中国地方出土の経塚遺物』、東京国立博物館（編）『MUSEUM』NO.178、東京

- b : 藤田藏 (1976) 「経塚の諸問題」,『世界考古学大系 4 日本IV歴史時代』第2版, 平凡社, 東京
- 16) 黒川篤道 (1897) 「銅製経筒の説」,『考古学会雑誌』第2編第5号, 東京
- 17) 桑原邦彦 (1978) 『物見山経塚』(山口県厚狭郡山陽町埋蔵文化財報告第3集 物見山経塚調査団 (編), 山陽 (山口)
- 18) 小池寛 (1994) 「竹製経筒の復元について一謹を塗布した竹製経筒の新例」,土橋誠 (編)『京都府埋蔵文化財情報』第52号, 向日市 (京都)
- 19) 斎藤忠 (1968) 「第八章 経塚及び関係遺跡」,『日本古代遺跡の研究 総説』吉川弘文館, 東京
- 20) 佐伯敬紀・中村博行 (1968) 「第2章第4節 経塚とその他の遺物」,『宇部の遺跡 宇部市域遺跡群学術調査研究報告書』,宇部 (山口)
- 21) 佐藤良二郎 (2008) 「大分県宇佐市妙楽寺出土経筒」,小田富士雄・平尾良光・飯沼賀司 (編)『経筒が語る中世の世界』(別府大学文化財研究所企画シリーズ①)「ヒトとモノと環境が語る」,思文閣出版,京都
- 22) 島田貞彦 (1917) 「周防国熊毛郡周防村立野経塚に就て」,『考古学雑誌』第8巻4号, 東京
- 23) a : 杉山洋 (1983) 「熊野三山の経塚」,奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 (編)『文化財論叢』京都
b : 杉山洋 (1983) 「同形態経筒についてー佐賀県市丸経塚を中心としてー」,『古代文化』第35巻3号, 京都
c : 杉山洋 (1985) 「太宰府の経塚」,(財)古都太宰府を守る会 (編)『太宰府の歴史』4, 福岡
d : 杉山洋 (1985) 「四王寺型経筒」,東京国立博物館 (編)『MUSEUM』NO. 413, 東京
- 24) 関秀夫 (1984) 『考古学ライブラリー24 経塚地名総覧』,ニューサイエンス社, 東京
- 25) 高橋健自 (1907) 「経筒沿革考」,『考古界』第6編第8号, 東京
- 26) 谷口哲一・吉中雅信・川本晃・岩田謙治・山本寛子 (2008) 『真尾猪の山遺跡II』山口県埋蔵文化財センター調査報告第64集, 山口県埋蔵文化財センター, 山口
- 27) 田畠直彦・中村仁美 (2001) 『山口大学埋蔵文化財資料館収蔵考古資料ー出土品にみる山口県の歴史』山口大学埋蔵文化財資料館, 山口
- 28) 田平徳栄・直塚員幸・杉山洋他 (1980) 『靈仙寺跡』(東背振村文化財調査報告書第4集 田平徳栄・直塚員幸 (編)), 東背振村 (依頼)
- 29) 布引敏雄 (1975) 「第四編 古代・中世の光」,光市史編纂委員会 (編)『光市史』光 (山口)
- 30) a : 弘津史文 (1929) 『防長和鏡の研究 附 防長の経塚』,山高郷土史研究会, 山口
d : 弘津史文 (1939) 「周防桑山西峯の経筒と保延六年奥書銘法華經」,『考古学雑誌』第29巻8号, 東京
- 31) 福島朝子 (1986) 『山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系等質土器について』,山口大学埋蔵文化財資料館 (編)『山口大學構内遺跡調査研究年報IV』, 山口
- 32) a : 福本幸夫 (1975) 「第二編 原始時代の光」,光市史編纂委員会 (編)『光市史』光 (山口)
b : 福本幸夫 (1966) 『先史時代の光市』福本幸夫 (編),光 (山口)
- 33) a : 保坂三郎 (1971) 『経塚論考』,中央公論美術出版, 東京
b : 保坂三郎 (1977) 「Ⅲ経塚 経塚概論」,『新版仏教考古学講座 第6巻教典・経塚』,雄山閣, 東京
- 34) 前田耕次・岩崎仁志 (1984) 「徳山市平原経塚」,山口県文化財愛護協会事務局 (編)『山口県文化財』第14号,山口
- 35) 村岡和雄・伊藤佳恵 (1979) 『山口市王子の森墳墓群』(山口県埋蔵文化財調査報告書第51集 山口県教育委員会文化課 (編)), 山口
- 36) a : 三宅敏之 (1977) 「経塚の遺物」,『新版仏教考古学講座 第6巻教典・経塚』,雄山閣, 東京
b : 三宅敏之 (1965) 「周防国日輪寺経塚遺宝」,『考古学雑誌』第50巻3号, 東京
- 37) 吉瀬勝康 (2004) 「4集成 国土師器 1. 7世紀～13・14世紀の様相」,山口県 (編)『山口県史 資料編考古2』,山口
- 38) 渡辺一雄 (2004) 「御山神社経塚」,山口県 (編)『山口県史 資料編考古2』,山口

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	一平成19年度-
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	5
編著者名	田畠直彦 横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 Tel083-933-5035
発行年月日	西暦2011年(平成23年)2月28日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 46秒	131度 28分 21秒	20070709- 20070724	48m ²	農学部附属動物医療センター 改修II期工事
白石遺跡	山口県山口市 白石一丁目9-1	35203		34度 10分 39秒	131度 28分 16秒	20070613- 20070703	121m ²	教育学部附属山口中学校 校舎等改修その他工事
山口大学 医学部構内遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35202		33度 57分 41秒	131度 14分 56秒	20060801- 20060806	6.75m ²	医学部総合研究棟 改修I期工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	奈良～平安	土壤・ピット	土師器・須恵器 瓦質土器	
白石遺跡	集落跡	讃文～古墳	落ち込み・ピット	繩文土器・弥生土器 土師器	
山口大学 医学部構内遺跡	散布地				

山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成19年度－

平成23年2月28日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

